特501
403

嵐田栄助 著

徹底せる思想国防論

太古史研究会
五十一音図表解説

1

0055437000

0055437-000

特５０１－４０３

徹底せる思想国防論

嵐田栄助・著

太古史実研究会

昭和１１．６

AJA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

永久保存

内務省
11.5.29
(普通出版)

嵐田榮助著

徹底せる思想國防論

太古史實の研究提唱
五十一音圖表國字問題

東京 太古史實研究會

6.5
内務省
安寧禁止

特501/403

52.9.5
帝國圖書館藏書

77W33679

はじめのことば

凡そ宇宙一切の事象には、それ〳〵に皆原因がある。そして我等の知覺に反映するもの、之れすべて、結果の現れに過ぎない。それであるから、單に結果のみあつて、原因のないものは、到底あり得ないのであります。故に結果の現れを以て、其の原因を支配するといふことは、出來ない筈と思はれます。けれどもその、原因をも支配し得るかの樣に考ふる事がありとすれば、それは原因のあつたことを無視するか又は忘れた、一時の錯覺であると、知らなければなりますまい。併し恐らく今の世の多くは、其の錯覺に陷つて來たのでは、ありますまいか。果して然らば、こゝに大いに覺醒して、篤と誤りを正すことに考へて見たいと、思ふのであります。學界に於ては、今より百年も後にならなければ、實現すまいと思はれた、高周波電滋波應用が、最近信州人に依つて見事に案出工業化されたといふが、近來の大なる出來事には違ひない。然れども、これは單に結果の現はれに過ぎない。又當然あり得る事を案出したまでの事であるとも思はれます。併し眞の大創造は、大原因により、宇宙を創造された大祖神に外ならな

いと、考へられるのであります。

左樣でありますからモオゼ、ロミウラスにしても、釋迦でも、孔子でも、ソクラテスでも、キリストでも、マホメツトでも、カントでも、當然夫々に發生の原因があつたに相違ないと、思はれるのであります。故に將來如何なる、學問の進歩、發明、發見、中途の創造や、案出があつたにしても、恐らく其れは、色々の原因結果が集積したるもの、即ち或る種の、綜合點に過ぎない、と思はれます。實に今日各個人的には、生活の不安に襲はれ、社會的には、經濟上の不安があり、國家的には思想上の不安があり、之れは決して、落ち付いた、安心の得られる、完全な文化であるとは云ひ得ない。

我國に於ては二千年來、外國の文化を採り入れる事に吸々として、今日に到つたのであるが、然しこれではどうしても、治まりがつかないのではありませぬか。

玆に於て、眞の己れをふりかへり、根本の大原因に遡り、大創造の文化を探究して、終始一貫、開闢以來大祖神の直統であらせらるゝ　皇室を基として、この精神及び文化を、發揚しなければ、これを他にして、完全な文化を求め得る道が全くないと思はれるのであります。

一、信仰目標の問題、

二、文字の諸問題、

三、太古史實の問題、

先づ、これらの問題から、大方諸賢の教を乞はんと、欲するものである。

彼の、竹內古文書及びウヘツフミは實に太古歷史の研究資料として、偉大なるもので、我等の驚かされる事柄のみに、滿ちて居るのでありますが、其の中に我が國は、日の本の國、オムヤの國として、往時我が皇室に於かせられては、全世界の諸民族を、統御せられてあつた事が、記載してあります。如斯事を傍證の一端として、歷史を見るに、中古儒佛傳來の頃までは、朝鮮任那(ミマナ)に、日本府が置かれ、大陸の統御に任じて居つた事が、明らかにされてゐて、太古以降、其の頃までの、赫々たる國威と、我が國民の意氣が偲ばれて、實に痛快である。然し乍ら、儒、佛渡來後、其の日本といふものは、非常に因循狀態に推移した、かの藤原、鎌倉、足利、戰國時代等、何れも國內紛爭にのみ沒頭し內訌して、遂に德川時代に移り來つたのでありましたが、玆に、明治維新に至つて、祭政一致、大政の大轉換を見再び日本が、本來の潑溂さを以て、漸く世界的に、立直つて來たのである。

人情は、近接する程、其の濃かなることを常とするのでありますが、若し中古以來最近の祖

先に於て、誤れる思想がありとすれば、其れを革める事は、當然子孫の任務でありませう。加ふるに大祖先の意志が、明瞭なる以上、其の根本思想を基調とする事に於て、何等躊躇すべきではなく、義を重んずる日本精神はやがて、大義を尊重することになり、忠孝兩全に當るものと考へられるのであります。此れ等を通觀してみても、永い間忘れられて居つた、太古史實の研究は、如何に重要なる事であるか、この點に就て、本書は幸に、注意喚起の緒ともならば著者としての目的は、達する次第であります。

○ 歴史の根本

いすゝ川　もと清まりて　とこしへに　みとりのふちを　ゆたにながるゝ

私は元來、我國體の淵源について、世の說話に耳を傾けることに、非常に興味を以て居るものである。五六年前、或る會合の席に於て、元滿鐵の重役谷村正友氏に、竹內古文書についての說を聞いたこともあつた。其の他色々の書類や竹內文書も親しく拜見した。其の結果、我國の現在五十一音圖表の內、イエウ、の三字が二重に配列されて居ること、及び異なる發音であるのにその文字の缺除されて居ること、これを日本文化の爲め遺憾に思ふて、其の補正につき、聊か愚見を申述べ、前陸軍大臣荒木貞夫閣下に御覽を願ふたところが、次ぎの樣な御手紙を頂いたのである。

『芳翰拜誦　五十一音に對する御高見敬承　今や世界文化に一大反省を促すと共に　國內に於て亦大に其の文化の根本を尋ねる要有之候折柄啓蒙する所有之候　玆に乍略義以書中御禮如斯に御座候　書外拜鳳の時に讓り申候　敬具　昭和九年十二月三日』

この御書狀を頂いて非常に、光榮の事と考へて、更に一歩を進めて、具體化すべきであると考へました。其の後二月には、帝國議會に於て、憲法學說に端を發し、國體明徵の論議が盛に戰はされた。其等も一種の刺戟となつて、更に一文を草し、前總理大臣齋藤實閣下に、御高覽を願つた處、直に次の樣な御手紙を頂いた。

『拜讀愈御淸康奉賀候御送付ノ趣意書拜見濟返上仕候　御趣意ニ對シ此ノ際特ニ可申上愚見モ無之御贊成ノ方々モ可有之候間大ニ御盡力祈上候老生目下色々ノ事ニ微力ヲ致シ居候得共老軀意ノ如クナラズ遺憾千萬ニテ更ニ御趣旨ニ贊同ノ餘力無之候間此段御諒承被下度候匆々頓首昭和十年七月五日』

越えて七月九日荒木大將に御目にかゝる機會を得て直接色々と御敎示を頂き、更に文部大臣

松田源治閣下の御指示を得て、芝田圖書局長には數回御目にかゝり、又保科孝一先生には色々實情について、御懇切な御教示を頂いた。『太古日本歴史』の著者前代議士岩田大中先生、音韻學の研究者春日興恩先生、何れも御懇篤なる御指導を賜はつた。又友人早川正夫君、杉山孝治君、角田甫生君、何れも種々御盡力下さつた事を、玆に謹而感謝の意を表するものである。

拙文は筆を起して壹年有余、想を練り稿を改むる事十數回、荒木閣下に御覽を願ふ事五度に及ぶも、不文菲才未だ到底意の盡し得ざるもの多し。宜しく大方の御示教を待つて、趣旨を全ふしたいと思ふものであります。

かむやまと皇紀二千五百九十五年十二月二十三日

日繼の御子　皇太子殿下第二回御誕辰の日をことほぎまつり　つゝしみて誌す。

著者　嵐田榮助

目次

巻頭　はじめのことば……一
一、開闢以來、神武皇紀に至る史實の研究……一
二、古事記と日本書紀は史實を傳ふるに充分でない……二
三、渡來民族學說は、開闢以來の我國體に背反するものである……三
四、太古バビロンに棲んだスメリヤ民族とは、我スメラギに相當す……四
五、學理的に國體を明徴し躍進日本の根源を究めよ……五
六、儒佛の渡來より後代に至り漸く記、紀の編纂は出來たのである……六
七、聖德太子の物された天皇記や國記も湮滅に會ふ樣な國情であつた……八
八、我國體は絶對で最高の大眞理に基く……九
九、我國固有文化の偉大なる證據……一〇
十、漢意（カラコヽロ）と佛教（ヽ）の余弊が日本固有の神代文字を認めないのであつたか……一一

十一、貴重なる上代歴史は大陸文化の影響を受けて歪められた事を想像し得る……三
十二、創生人祖御降誕迄の御代……一三
十三、太古に於けるスメラミコトの御代々歴史（アメスヨシロ）御編纂……一五
十四、神武天皇は皇統第九十八代に亘らせらる……二〇
十五、氷河時代果してあつたか、往昔は、今より寧ろ高溫度ではなかつたか……二一
十六、神日本魂御劍（カムヤマトタマシミフルヲ）は日本刀劍の始祖か……二二
十七、精神、物質の兩方面より見たる神秘的日本刀……二三
十八、日本魂の分類と其の性質……二三
十九、我國民性の一面はまことに風流素朴……二四
二十、純正潔白なる國民性は神をいつきまつる……二五
二十一、古き神社には太古より傳ふる神代文字あり……二六
二十二、神武天皇御時代の直前四度の大地變があつて素朴にかへつた……二七
二十三、我が國語の妙趣は萬國無比である……二八
二十四、神代より傳ふる和歌……二九
二十五、文字論年表……三一
二十六、我國太古文化は遡る程典雅にして優美高尚……三六
二十七、ソラツヒコと宇宙線……三七
二十八、ことたまの中には我國體と吾人體とを全一體せしむるものがある……三八
二十九、高天原と日祖之原と我等は一元一如也……四一
三十、「古事に附く」ことたまは我等が言語創生以前の思想史料の一參考……四二
三十一、神國の威嚴を示すに充分なり……四三
三十二、經文の素讀は庶民には解りがたい……四四
三十三、眞理は側近目前到る所に充滿せり……四六
二十四、日本文化は全人類の指針……四七
三十五、本會の研究すべき內容目的（のりことば）……四八
三十六、全人類の共存共榮は日本精神なり……四八
三十七、歐米の物質文明は自壞作用を起しつゝある……五〇
三十八、唯物論と新學說……五一

三十九、精神と物質は萬有一元の大原因たる大創造の大祖神である……五一
四十、全民族の發祥地は日本帝國なり……五二
四十一、近世史上稀に見る日本の發展は我が皇室の尊嚴無比なるに因る……五三
四十二、日本國民に與へられたる使命……五四
四十三、日本文化の世界的進出に當つて第一に反省すべき問題……五五
四十四、五十一音圖表の補正すべき三箇の重複文字……五六
四十五、我國字問題……五八
四十六、限りなく發展する文化に即したる天日靈文字の新登場……五九
四十七、五十一音を明徴にし我が國字問題を解決する實行と其の順序……六一
四十八、神代天日靈文字及五十一音圖表……六四
四十九、つめことば……六六
（一）活性の素。（二）大和一體。
五十、感想と其の感想……六九
（一）念を入る。（二）人類の本質。

（三）眞善美。（四）稻荷と居做。
（五）マルコ・ポオロ。（六）吾人の任務。
（七）トドロツツミ。（八）漢文と記紀。
（九）漢字萬能。（十）竹内古文書。
（十一）三脚一體。（十二）五十一言文。
（十三）世界の祖國。（十四）キリスト。
（十五）光被滿。（十六）ムオゼ＝ロミュウラス。
（十七）伏羲、神農。（十八）超國家。
（十九）至上主義群。（二十）講演會。

太古史實の研究

『思想國防に關する卑見』

嵐田榮助

一、開闢以來、神武皇紀に至る史實の研究

吾等は今、自分の脚下を見直さなければなりませぬ。先づ吾が民族の、歴史を見直すのであります。さて吾等の歴史は、現在皇紀二千六百年でありますが、其の皇紀に至る前の歴史が、どの様でありましたか、現在傳つて居る様な漠然たるものでなく、遡つて天地開闢に達するまで、皇統は連綿としてゐることが、明かに示されたならば、我等の指導精神に、朗らかなる光明を添へて、昏迷せる人心を導き、陰欝なる連日の雲影も拂ひ、一天快晴して、待ちわびたる

久かたの日輪を拜する如く潑剌たる生氣を與ふることになりませう。

○ 理念の確立

ふみわけて　思ふこゝろの　礎に　立ちてそいのる　とよさかる日を

二、古事記と日本書紀は、史實を傳ふるに充分でない

現在に於ける、我太古史の典據は、皇典古事記、日本書紀等でありますが、これとて、ある學者の說に依れば、文和四年頃足利尊氏の手によつて、全部改竄されたと云はれて居る事、その後德川時代の初期慶安四年の頃古事記の眞福寺本といふ物が發行されたとのことですが、德川時代の末に到つて、本居宣長其の他の國學者が、唯一の皇典として、續けられて來て、今日に至つたものと、いはれて居りますが、でも、其れ等に示されて居る所の事實は、あまりに神典式であつて、日の本の史實を傳ふるに充分ではありません。勿論外國の神話と同一に見る事が出來ない。我等の皇室は、開闢以來萬世一系と稱へられて居るのに、太古史としては、いかにも天上神話の如く、漠々たる有樣であります。

三、渡來民族學說は、開闢以來の我國體に背反するものである

左樣な狀態に置かれてある爲に、今は西洋人の發明したる民族學說を盲信し、何等恥づるところなく我民族も亦世界諸民族流の混合民族であるが如き言を做し、先住民族說や、渡來民族說、クロボツクル、ヂングウス、崑崙、ヒマラヤ、インド、支那、アセアニア、アウストリヤ系、諸嶋、諸血統の混融民族說が橫行して、誰も別にあやしまぬといふ、現狀であります。然し之れでは、我が國の開闢以來といふ思想が、成り立たないではありませんか。之は明治以來の學問の系體が西洋學である爲に、吾が民族をも舶來者であるが如き、觀念に陷つたのでありませうが、我國には立派な古い歷史があります。更に遡つて申せば、我が國の歷史及び其の文化は、既に二千年來大陸文化の隆んなる輸入以來、その文化と共に、幾多の弊害も伴つて、我がかんながらの精神に、實に容易ならざる大影響を與へたのであつた。

四、太古バビロンに棲んだ　スメリア民族とは、我スメラギに相當す

古事記や、日本書紀の物語的神話でなく、もつと明らかな、太古記錄が、竹內古文書といふものに　現存されて居ることが　最近發見されたのであります。尤も皇紀一千八百八十三年貞應二年に彼の大友能直が、寫本したといふウヘツフミも存在して居つたが、所謂神代文字の文書なるが故、從來あまり省みられなかつた。これも一方に於て昨今研究を進められて居るが、竹內古文書と一對を成すものである。然して竹內古文書は實に根本を成すものであつて、我民族は、天地開闢からの民族であることは勿論、我文化及び其の血族が、全世界に向つて、發展分布されたといふ、大記述があります。ところが、地球上に於ける、人類の歷史は、最も古い國はバビロン七千年、埃及六千五百年、支那五千年、印度四千年、次ぎに朝鮮、ロオマ、の順序であつて、太古バビロンに居住したのは、スメリア人で、スメリア人とセミチツク人との混合は、バビロン人なり、となされて居り、西紀より五千年前の頃は、既に幾多の都市を建設し、

各都市には守護神を祭れり』(野村佐一郎氏著「世界各國史」昭和十年七月發行)といふやうなことに、今日なつて居りますが、我日本は、バビロンの七千年どころではなく、もつともつと古い歷史を持つてゐるといふのです。かやうに申しますと、恰かも奇狂のやうでありますが、前掲の野村氏の一文を取つて見ても、太古バビロンに棲んだ人種は、スメリア人とありますが、スメリアといふ言葉は、我が國のスメラギに相當し、又各都市に守護神を祭つたいふことは、我が國の鎭守に相當します。

五、學理的に國體を明徵し躍進日本の根源を究めよ

前述の通り我太古史といふものが　現在では、甚だ漠として居る爲めに、西洋學を基準とした、浮說に壓倒されて、我獨自の尊敬を失ふやうなことにさへなつてゐる。

そこで幸ひにも吾等は、竹內文書といふものもあることでありますから、其れ等を參考として、色々の方面から、根本的に太古史實を研究し調査し、學問的にも、我が國體を明徵ならしめ、如何なる場合にも、永久に動搖しないやうに、思想の根柢を理念の上に强固にして、今日

の躍進日本の因つて來る根源を、明らかにすると共に、自ら嘲けるやうな思想は、斷然一掃したいものであります。

かくて、世界最古の文明は、實に日本文化であつたことが、明らかとならば、我が國の、開闢以來萬世一系である事も判然するものと思ふのであります。

○ いやさかえ

おこりては　亡ふる國の　あるなかに　いや榮えゆく　日の本の國

六、儒佛の渡來より後代に至り漸く記、紀の編纂は出來たのである

今玆に試みに、古事記、日本書紀が書かれた、あのあたり、我が國の狀況をかへりみますれば、我國に初めて論語や千字文の渡來したのは、皇紀九百四十五年、應神天皇の御代であつて

御即位八十五年に、百濟の阿直岐と學者王仁が來朝して、献上したのでありますから、今より壹千六百五十年前であります。

我國に年號の始めて用ゐられたのは、皇紀壹千三百五年孝德天皇御即位の年で、大化元年と定められた、これ世にいふ大化の大革政であつて、諸々の國制が大いに革つたのであります。年號の制度も創設せられ、全國には六十餘の國分寺も建立されたのである。論語と千字文の入つた年からかぞへると、其の間三百六十年を經て居ります。

我國に佛敎が公然と渡來したのは、皇紀壹千二百十二年欽明天皇の御即位十三年に、百濟の王が、佛像と經典を献上した時で、彼の佛敎の大殿堂伽藍である法隆寺は、現在に於ける世界最古の木造大建築となされ、而も美術の粹を集め、其の內國寶と定められしもの實に、四百有餘點に及ぶといふ程で、今世界の學者を驚かして居りますが、この建築は今より壹千三百二十三年前、皇紀壹千二百六十七年、推古天皇御即位十五年に建立されて居ります。佛敎が傳はつてから此の間、僅か百五十五年を經て居るのみであります。而も亦其れより十四年前、壹千二百五十三年には、別に四天王寺が建立されて居ります。そこで、千字文や儒敎が這入つて來て四百二十七年を經、亦佛敎が入つて壹百六十年を過ぎ、元明天皇の御代和銅五年、即ち皇紀壹

千三百七十二年に至つて、漸く古事記が編纂されてゐる。而して其の後八年を經て、日本書紀が編纂完成されたのであります。

七、聖德太子の物された天皇記や國記も湮滅に會ふ樣な國情であつた

あの樣な文化の集成された法隆寺が建立されて、後壹百五年も經てから古事記が編纂されたことになること、及び日本書紀が壹百十三年後に出來た譯でありまする事、其れ等の時代と文化と又其の事物を思ひ合せる時に、其れ迄にはもつと外に、色々の記錄や、大切な歷史の編まれたものが出來てゐなかつたとは、信ずる事が出來ませうか。最も、皇紀壹千二百八十年頃、聖德太子の法隆寺建立を見た十四年前に、天皇記や、國記といふ本の編纂を見たのでありましたが、忽にして蘇我蝦夷の爲に悉く湮滅されたとなされ、今は傳つて居りませぬ。これを以て見ても、其當時の世風の一般が窺はれませう。

○日の本の內くもり
からこゝろ　佛こゝろの　渡り來て　みひかりうちに　日はくもりけり

八、我國體は絕對で最高の大眞理に基く

そして、或學者の說に據れば、古事記や、日本書紀は主として日本魂の眞髓を、講ぜられたものであるから、從つて歷史の目的に編纂せられたものではないと、申されて居ります。又一方に於ては、我が固有の文化や、日本魂のやうな、精神文明は、もとより其の當時以前からあつて、相當根柢の深いものを持つて居つたればこそ、儒敎や佛敎やあの樣な思想が、短日月の間にかくも徹底的に、咀嚼しながら、取り入れられたのであります。其の咀嚼力、これは實に、畏れ多いことを一例といたしますが、皇室には、太古以來傳はつて居る、三種の神器といふ御寶があつて、古今東西、あらゆる宗敎哲學を超越してゐると申されて居る。實に崇高にして萬卷の敎典にも優る絕對最高の眞理であつて、大和魂も之より發し、大創造大原因の祖神より、

日の大御神を經て、一系直統の皇室に存在するが故に如何なる眞理も、其より奥を探求する事が出來ない所の、根本の大眞理に立脚されて居る。これに據つて如何なる宗教も哲學も安易に咀嚼する事が出來る筈で、實に偉大なる力であります。如斯高度の精神文明は、全く文字もなしとする非文化民族の、よく享受し得べきものでないと思はれるのであります。

宗　派

もとの亡ふ　こゝろのもとの　道しるへ　よりてすゝまん　すへなかりけり

九、我國固有文化の偉大なる證據

當時は未だ極めて素朴なる國情の内にありながら、かくも我固有の日本文化や、日本精神の偉大なるものがあつたといふことは、外來文化の强壓に抗して、素朴の内にも其の根柢には、更に絶大なる我國固有の力がありましたからであります。又玆に我が國固有文化の偉大なる證據として、伊東忠太博士の說に依れば『日本の建築は、佛教渡來の以前を、第壹期として發達し、開闢の太古から其の宮室、神社の如き、世界無比なる獨自の建築手法を持ち、第二期として、佛寺建築を抱容し來り、第三期に至つては、明治以降であるが、歐米其の他、全世界の樣式を採つて、公共的の建築が中心となり、限りなく發達するであろう。尙我が國の如き建築史は、實に世界獨步であると共に、古來未だ曾て、外國より威力を以て、其の文化を强いられたことが無かつたからである。』と申されて居る。

十、漢意（からごころ）と佛教の餘弊が日本固有の神代文字を認めないのであつたか

この佛教渡來以前の太古建築や、文化の程度から考へましても、あの時代に於て、我國に固有の文字なし等といはれて居る事は、正しい論としては、如何にしても、信ずる事が出來ない次第であります。其の時代は未だ印刷の法もなく、單なる記錄に過ぎないところから、今日とは趣きを異にし、極めて重要なる書類も、容易に湮滅されることが出來得る狀態に置かれてあつた。併せて其の當時は、漢意（からごころ）や佛教の餘弊が、今日いはれてゐる舶來かぶれ以上に、嘸や旺

盛であつたらうことが、想像に難くはありません。その證據と見得る古事記、日本書紀を草するに當り、當時外國文字であつた所の、漢字體を專用して、編纂されて居るのを見ても解りませう。そこで、或は立派さうに見ゆる、漢字から比べて、アイウエオ假名や、其の他の神代文字などは、文字の部類に入らぬと、漢意の人等には考へられたのでありますまいか、丁度今日の西洋萬能時代に西洋文字で大切な國家の歴史が、綴られたも同然であります。さようなものをもつて、今國體を案ずる唯一の典據とされて居るといふことは、聊か當を得ぬことではありませんか。從つてこの不安定は、色々な形となつて、顯はれて來る思想動搖の基でありますから、斷乎として、正しく革めなければなりますまい。

十一、貴重なる上代歴史は大陸文化の影響を受けて歪められた事を想像し得る

又實に此の時代以前は、史實として傳ふるもののあまりに少く、或は其の間貴重なる日本歴史の大方は、其れ等外國、詰り支那印度等の文化の影響を受けて、事實は悉く歪められたのであろうことは、想像に難くありません、遲蒔きながらも、今日にして、我太古史を根本的に見直すことにしなければ、悔を更に永久に殘すやも量られぬのであります。

○神代歴史

日の本の　あめすよしろを　究めなは　迷ひの雲や　はれわたるらん

十二、創生人祖御降誕の御代

一方眞の太古史實は、前に書いた竹内古文書に秘藏されて在るといふのでありますが、その秘藏に至る經緯は暫く措く事にいたしまして、今其の太古史實の一端を覗つて見ませう。岩田大中氏の『太古日本史』を參照いたしまして、開闢に至る抑も絶對の大御神は、

神代文字神靈寶の卷（其の一端を謹載す）

元無極體主大御神、（獨一神）

亦名、ノンノ、ナアモ、アミン、

開闢の前天地いまだ、さだまらず、例へば、鷄の卵の如く、混沌たる際に、天地を造り給ふた、大御親神である。以下四柱奉略。

天一 天柱 主大神 豐光神、

天一 美柱 主大神、

天ノ眞柱主の神と、美柱の神と、御成婚を見る。大儀を擧げさせられた所を、淡海根といふ。萬國の應地美といふ言葉は、この時に始まり、地美の國名をつけらる。國の萬國をつくるに至つた、大柢元である。以下三柱奉略。

天御光太陽貴王大光大御神、

亦名 天照日大御神、

天日身光ミドノヒ女大神、

男人祖御降誕、

天日豐本葦牙氣皇主尊

以下二十五柱奉略。

日の御神が朝早く、日の出されて、日が長くなる頭の日を、歳の首めのまつり日で、

コノメハル、ムツヒ、タツ、の一日と定め、給ふ。

日々の短かき日を、コネノクレ、シマイツ、コモリ、十日、クレ、日と定め給ふ。

天御光太陰貴王女大神、亦名（月の神身光神）

天日身光ホド男大神、

女人祖御降誕、

天日豐本葦牙氣皇美尊、

以下十二柱奉略。

十三、太古に於ける、スミラミコトの御代々歴史

御編纂

皇統第一代

天日豐本葦牙氣主身光大神天皇、

天日豐本葦牙氣美神皇后、

皇子御降誕、

造化氣萬男神。

以下奉略。

天日國より、天元根ノ國へ始めて遷し、天ノ越根國と命じ給ひ、天神人祖一神宮を御造營なさせ給ふ。御造營に任ぜられた尊は

天豐工人宮造知尊、

天日家造工知彦尊、

以下奉略。

皇統第二代

造化氣萬界身光神天皇、

造化氣萬美身光神皇后、

詔して、天日萬言文造主尊に命じ給ひ、上代の萬神々を文にし、天神人祖一神宮の御靈に納め給ふ。

以下奉略。

皇統第三代

天日豐本黃人皇主身光天皇、

天日豐本黃人皇美神皇后、

上代神々及天皇の御名と、萬國主御勅定の次第を御誌し給ひ、越根中國日見日高見の、天神人祖一神宮の御神體に合祭し給ふ。

以下奉略。

皇統第四代

天之御中主神身光天皇、

天之御中美皇后、

詔して上代神々、天皇、皇子、百官の歷史作製を命じ給ふ。言語差別文知神外御七方の尊により、歷史編纂が成り、之を天越根中大日見國光池上　神明天人神祖神宮の身靈として奉納し給ふ。

以下奉略。

皇統第十四代

國之常立身光天津日嗣天日天皇、
國之常姫皇后、
天皇詔して、天豐形假名知尊外六皇子に歴史を編纂せしめ給ふ。

以下奉略。

皇統第十五代、
豐雲野根身光天日嗣天日天皇、
豐斟美皇后、
天皇詔して、皇子に歴史を編せしめ給ひ
元無極體主大神より、國之常立身光天津日嗣天日天皇までを、天上代の神と稱して成れる、卷物を皇祖皇太神宮の身體靈とし、新に太神宮の本殿及び、前殿を造營し給ひ、天皇自ら祭主となりて、勸請しまつる。

以下奉略。

皇統第二十一代
伊邪那岐身光天津日嗣天日天皇、

伊弉冊皇后、
天皇　皇后　天下萬國の棟梁大根天津日嗣天皇の御寶として、ヒヒロガネにて親しく劍矛を作らせ給ふ、兩神、清きすが〳〵しき水にて、御身を禊祓し、清米七年三月目にして御完成、ホド文字、ミド文字にて、御神名及び萬國の圖を刻みつけらる、皇統十八代大斗能地、皇統十二代カシコネ、イザナギの三種の御劍の神寶は皇統前天照日大御神の、御勅に基き給ひ、萬國五色人の棟梁たる、皇孫天皇　無極億代まで必ず　天日天皇　の身守となし給ふ。

以下奉略

皇統第二十二代
天疎日向津氏賣身光天津日嗣天日天皇、
亦御名（天照大神）神倭第十代崇神天皇の御代に御諡名なさせ給ふと傳へらる。
天皇御自ら、御劍を、ヒヒイロガネを以て造らせ給ふ。御鏡を、天日眞浦尊に命ぜられ、ヒヒイロガネを以て造らしめ給ふ。御玉を、生玉尊に命ぜられ、ヒヒイロガネを以て造らしめ給ふ三種の御神寶は、アメマツリ、クニマツリ、スミラミコト、代々の、カンタカラと定め給ふ。

以下奉略。

皇統第二十八代不合皇朝三代

眞皇眞輝彦天日天皇

上照媛皇后

天皇詔し、歷史編纂を總臣思兼靈之田布榮彦尊の外十一方に命じ給ひ、新歷史成るに及んで、天皇御自ら大神宮に合祀し給ふ。

以下奉略

皇統第二十六代

武鵜草葺不合身光天津日嗣天日天皇

不合皇朝第一代天皇と申し上げまして、神倭皇朝に達せられる迄、七十三代に亘らせられたのであります。

十四、神武天皇は皇統九十八代に亘らせらる

皇統第九十八代

狹野不合七十三代天日嗣天皇

御改め　神日本磐彦天皇　は神倭皇朝第一代天皇と申し上げて、即ち、神武天皇であらせられます。實に太古時代に溯る程、御在世頗る長年月でありまして、スミラミコトの御一代から、神武皇紀に至る其の間幾萬年になりますか、恐らく天文年代にも比すべきであるかも知れませぬ。何れ調査研究の結果を俟つて、判明に近づくものと、信ずるもので御座います。

十五、氷河時代果してあつたか、往昔は今より寧ろ高溫度ではなかつたか

太古の時代にありましては、彼の氷河時代といふことも聞きますが、其の後亦反對に現今よりはもつと、高溫度ではなかつたのかと思はれる節があります。其れで或は高貴なる御方々は高原地帶を擇ばれ、下層の方面は水邊等に多く居住したるが如く、又は北傾斜地帶の水邊等に多く遺蹟を發見することがあります。其の他國內夫々の地點より、熱帶動物の化石等も色々發見されて居ります。又我が國固有の建築には、割合に防寒を主とされてゐない等、其の他種々

綜合するに、降雪なども少かつたか、古記録には寒いといふ模様が見えないやうであります。

十六、神日本魂御劍は日本刀劍の始祖か

皇統第十二代
宇麻志阿志訓備比古遲身光天津日嗣天皇の御代に當時御七方の皇子樣の御方々に勅命ありて、作製あらせられたのが、ヒヒイロガネといふ金屬を以て、造らせられたのであります。實に量り知られぬ程太古の時代でありませう。これこそ、現代日本刀劍の始祖ではありませぬか。上代の事は又別の機會にいたしますが。

○日本刀

たちつるぎ　すぐなるはさき　こる糀の　にほふあさ日を　をかむ益良雄

十七、精神、物質兩方面より見たる神秘的日本刀

今や、日本刀は、全世界に於て最も優れたるものと稱へられ、然も武器であつて、破邪顯正の意味を持ち、時には自己制裁にも役立ち、其の洗煉さは、美術の眞髓を具有し、其の藝術味は、天地の正大を思はしめます。之れ實に太古より、皇室を中心として發達し來たり精神と物質の均齊調和を得て、正に神秘化され、日本精神を具現したる、氣品の高い特有のもので、現代科學の進歩したる時に於てさへ、世界の識者を驚かしむるに足るといふも、故ある哉であります。

十八、日本魂の分類と其の性質

○乃木大將の歌

久わしほこ　千足の國の　益良雄の　あらみ魂こそ　劍なりけれ

實に、魂は人間にとりて、最も大切なるものと申されますが、春日興恩先生は『魂の内には あらみたま と にぎみたま がありますが にぎみたま は生成化育であつて、あらみたま は創造發展であるが あらみたまの内にも、さちみたま くしみたま の二つに分つことが出來る、そして くしみたま は永遠に一貫せるもので さちみたま は盛衰動搖するものであると、』申されて居ります。

十九、我國民性の一面はまことに風流素朴

實に我が國の特種なる諸事相をもつて見ても、日本文化が頗る古く、實に數萬年の遠き歴史を有して居るが爲でありませうが、又他の一面に於て我國民性は、今尚自然のまゝ、飾りけのない、原始的な素朴さも持つて居ります。居住する家屋は、草葺屋根であり、冬の頃は、圍爐裡に榾など焚いて、遠來の客をねぎらふといふ工合で、圍爐裡に用ふる、風流なる自在鈎などは原始味があつてまことに面白い。また餅をつく音などは如何にも平和に響きます。何時の頃から木造の建築に土臺石を使用することになりしか、其の以前は、掘立式の建築であつたと思はれます。又其の家屋の構造は、如何にも自然を取り入れて、尚且つ親しみよく、平和らしく開放自在に、組立られて居ることなど、室内の保溫上、外氣の遮斷や、光線の調節等に、優雅なる窓や障子は、楮の皮で漉上げられた紙で張られてあります。床には疊を敷く、又別に床の間と云つて、昔の創意はいざ知らず、只今では如何なる階級に於ても、美術を愛好する用意として、それを忘れないで、設けられて居ります。

二十、純正潔白なる國民性は神をいつきまつる

外出の場合の履物は下駄とか草履と云つて、何れも脱ぎ穿きに便利なるものを用ゐ、室内には必ず脱ぎ取つて這入るのが定法で、洵に潔白なる特質と云へませう。衣類等に於ても、幾多の特長を持つて居りますが、居住する家屋の出入口の鴨居は、その上に、神棚が設けられてゐることから、神居かむゐの轉訛であると申します。これを以て見ても、常に神をいつきまつるといふ精神は、國民全般の先天的な常識で、村には村社あり、鄕社、縣社、國幣社、官幣社、等全國には、内務省の臺帳に、登錄されて居るもの斗りでも、拾貳萬餘の數にのぼる、至る所

の鎭守の森は、鄕土の最も親しき、長上祖神に接する目標で、亦日本民族の特質であります。

○美　俗

みやの森　老も若きも　集ひ寄り　君を迎ふる　今日のうれしさ

はれきして　翁も子等も宮の杜　つとふ今日こそ　たのしかりけれ

二十一、古き神社には太古より傳ふる神代文字あり

祖先長上を尊敬するといふこと、神にいつきまつるといふ、この二つは、二にして一でありまして、家族生活の延長は、直に社會生活であります。我が家にある時の個人と、國家に於ける個人と、そこに全く、完全なる融合一致を持つて居るのであります。又古き神社にありましては、太古より傳ふる、護符や御寶物等に書き印されてある、神代文字は、我が國太古時代に於ける、固有文字であつて、アヒル、日文、形神名、マチカタ、ツクシ、コレタリ、インペ、アメコシネ、アイノ、タネコ、モリツネ、ムサシ、ツシマ、アヂチ、アメコシカヅ、テミヤ、

等々色々な、種類の文字が見られるのであります。

『文藝類纂』明治十一年文部省發刊榊原芳野氏編纂のものにも神代文字に就而記述されて居る。

二十二、神武天皇御時代の直前四度の大地變があつて素朴にかへつた

神武天皇の御時代、其の皇紀より八十年前から、二百七十年前に至る間、壹百九十年の間に於て、地表の一大異變に遭遇せしこと、實に四度にも及びしといふ、故に當時の文化の悉くは、根柢より覆滅に歸したやうに申されて居ります。これ等が、事實であつたならば、其の當時の國情は、如何に一變し、再び原始的な素朴の時代に還へされたことであつたか、想像する事が出來ませう。然るにそれ等を經て、今や三千年、再び天運はここに、全く循環して、皇運益々隆昌ならんとする今日、我等の有する、太古歴史を明らかにし、光輝ある歴史をして、世界の全人類に宣布することは、實に實に急務中の急務でなくて、なんでありませう。

二十三、我が國語の妙趣は萬國無比である

さて前に述べました通り、中古に於て、漢字經典の隆んなる時代にあつては、漢字は本字と云つて、漢字偏重の傾向を來たし、今日に至りましたが、我國には漢字を以てしては、充分表現することの出來ない、國語がありまして、この國語の發音は、五十一音を以て組織され、尊貴なる神韻を傳へて居ることは、一般に知られてをります。我が國語には、言靈ことたまと稱して、古事記等にもありますが、其の豐富なる妙用は、我が國特有のもので、妙趣無比の言語であると申されてゐます。實にや、俳句の如きは、わづか十七の音韻に依つて、生活の情緒を、巧妙に、表現されたものであります。

○俳人一茶六歳の作

われときて　あそへや親の　ない雀

もつたいなや　晝寢してきく　田うゑ唄

○加賀の千代女

初雪や　二の字二の字の　下駄のあと

破る子の　なくて障子の　寒さかな

初雁や　ならへてきくは　おしいこと

○五合庵の良寛和尚

焚くほとに　風のもてくる　落葉か那

更に和歌の如きは三十一文字で、實に優美なる、太古ながらの短き詩で、至る所に普及されて居り、其の文學たるや、實に民衆的のものであります。

二十四、神代より傳ふる和歌

皇統二十二代　天照大神の御弟君

○スサノヲノミコト

ヤクモタツ　イツモヤヘカキ　ツマコメニ
ヤヘカキツクル　ソノヤヘカキヲ

スサノヲノミコトキサキ

○イナダヒメ

ヒモクレヌ　サヒツメノトハ　ハヤトケヨ
コヽロノヤミニ　ワレマトハスナ

皇統二十四代　スミラミコト

○ニニキスミラミコト

アカカケノ　アケホシイケノ　アサマヤマ
ニコリテソヨヲ　スクフヘラナル

○ニニキスミラミコト

オキツモハ　ヘニハヨレトモ　サネトコモ

アタハメカモヨ　ハマツチトリヨ

皇統二十五代　スミラミコト

○ヒコホホデミスミラミコト

ヲキツトリ　カモツクシマニ　ワレイネシ
イモハワスラス　ヨノコトコトモ

ヒコホヽテミキサキノミヤ

○トヨタマヒメ

アカタマノ　ヒカリハアリト　ヒトハイヘト
キミカヨソヒシ　タフトクアリケリ

斯くの如く神々の御歌を見ても、文字がなくて、かかる美事な詩が出來ませうか。

二十五、文字論年表

『德政金吾氏著　古代埃及と日本』

左にその一節、

『最初漢字の渡來（應神朝）（皇紀、九一八年　西歴、二五八年）

百濟の王仁が論語及千字文を携來す。

佛教傳來（欽明朝）（同、一二一二年　同、五五二年）

古字（フルキナ）の記錄に漢字を以て日本字に附すとあり

聖德太子憲法制定（同、一二六四年　同、六〇四年）

聖德太子天皇記、國記（同、一二八〇年　同、六二〇年）

其他臣下の本記を撰錄す。神代口譯に曰く、

此記以漢字附日本字とあり。

天武天皇の勅命に依り日本記（同、一三四三年　同、六八三年）

川島の子等十二人に新字（ニイナ）を以て撰錄せしめらる。日本記四十四卷成る。

圖書寮の四十四卷の書が覗ひ得るを得れば明白なるべし。

古事記成る太野安麿編。（元明朝）（同、一三二七年　同、六六七年）

日本書紀三十卷成る。（同、一三八〇年　同、七二〇年）

吉備眞備、再び唐より歸朝（天平勝寶六年）（同、一四一四年　同、七五四年）

片假名の作者と稱せらる（疑問）

齋部廣成「古語拾遺」を奉る（同、一四六七年　同、八〇七年）

平城天皇に文字なしの建白書を奉る。

空海、高野山を創建す。（同、一四七七年　同、八一七年）

いろはの作者と稱せらる。（疑問）

三善清行、勘文を奉る（無文字派）（同、一五七四年　同、九一四年）

大江匡房、箱崎の記（無文字流）（同、一一〇七年　同、一〇七七年）

大友能直、上記（ウヘフミ）を寫本す（貞應二年）（同、一一八二年　同、一二八三年）

上記（ウヘフミ）今尚九州大分縣大友家に元本存す。

忌部正通、神代口釋を著す。（同、二〇二七年　同、一三六七年）

齋部廣成の孫。

貝原益軒死す。（無文字派）（同、二三七四年　同、一七一四年）

新井白石の遺稿國文通考出づ。（同、二四二〇年　同、一七六〇年）

締忍律師の以呂波間辨　（皇紀、二四二四年　西歴、一七六四年）

寶暦十四年正月尾州八事山興正寺住職締忍著、律師の駁々に曰く、「現在鎌倉鶴岡八幡宮寶庫又河内平岡宮とに神代神字の記錄あり、中略予が伊呂波間辨に舊き神社には上古の神字今に殘りて儼然として存在するものなり」

締忍律師著、神國字辨論　（同、二四三八年　同、一七七八年）

本居宣長死す（無文字派）　（同、二四六一年　同、一八〇一年）

平田篤胤、日文傳及古史徵を著す　（同、二四七八年　同、一八一八年）

吉良義風、上記鈔譯、（明治十年版）　（同、二五三七年　同、一八七七年）

落合直澄著日本古代文考（明治二十一年版）　（同、二五四八年　同、一八八八年）

北黒蘭著日本語の根本研究（昭和五年版）　（同、二五九〇年　同、一九三〇年）

○忌部正通神代口譯に應神天皇の御宇異域の典經「千字文」始めて來朝してより以降、推古天皇に至つて、聖德太子漢字を以て和字に附したまふ」とある。

○推古帝以前の帝紀が和字で記錄されたること明瞭である。

日本紀並に順和名抄に吾國の古俗、父を加曾（カゾ）といひ母を伊呂波とぞいひける、とある。

○天照大神より、ヲホアナムチノミコト（大巳貴尊）に授け玉ふて後、アメノヤココロノミコト（天八意命）と共に四十七音を以て神代の文を作るとありその四十七音は（カゾ歌といふ）

ヒフミヨイムナヤコトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハクメカウオエニサリヘテノマスアセヱホレケ。

○神皇正統記に「彼の天の逆矛に五十の金鈴、天宮の圖形ありき」とある、大祖神の下し賜ひし記念の寶劍に五十の鈴であつたか、それとも鈴は音を發するが故に、音を表現した圖形にはあらざるか、五十鈴川、硯　鈴　は　カムト語にてスズは文字といふ意味である』

○

埃及の太古の語をカムト語といふのは　神人語（カムト）　といふ事ではないかと思はれます。

○御祖神といすゞ川

いそすゝの　川の流れの　そかなかに　みおやの神の　のりのことたま

我國太古の文化を否認して、固有文字なしなどと申されたならば、そは明らかに我國文化の湮滅であつてその大なる責任を遁がるゝことは出來ますまい。

○然るに今に於て尙、彼の大學の學者や、其の他多くの諸大家が、古文書の內でも、わりかた漢文體のものであれば、珍重して研究せらるゝ傾向であるが、然るに神代文字の古文書となると、內容が如何に重要な事であつても、大切なことであればある程敬遠されるか、又は僞作などと輕視されて、これを究めようとせられない。即ち省みられないのである。之れ神聖にして公平なる學究として、然るべきであらうか、疑ふものであります。

二十六、我國太古代は遡る程典雅にして優美高尙

實に我が古代を偲ぶに、その時代に於ける、一般用度嗜好及び、美術亦は刀劍の如き、又和歌や古代文學の上に表はれて居るもの、其の他、我固有の建築、繪畫等、何れの部門から眺めても、往時に遡る程、人情や風俗いとものびやかに偲ばれて、外國のそれに見るやうな、俗惡殺伐たる蠻風などはなく、平和味が橫溢し、而も典雅にして、優美高尙なるものを發見されるのであります。これを以て見ても、日の本又は神の國、他の國からは不老不死の藥のある國、蓬萊の國といはれただけあつて、先天的に君子國として、氣品の高い文化で、加ふるに極めて雄大であつた、又樂天的に朗らかで潑剌なものもあつたやうであります。

○上代の萬國棟梁オムヤクニ

いだな國（アジヤ）　ゑひろすよもつ（アメリカヨオロツパ）　おしなへて　みおやの神を　おろかみにけり

二十七、ソラツヒコと宇宙線

太古に於て、ソラツヒコ、といふ言葉があります。古事記等にも見ゆるので、それは太古の驚く可き文化を物語つて居る言葉の樣であります。春日興恩先生の說に據れば、『ソラツヒコ之れは日本神魂の根本で、音聲發生の原理、大御神の生成化育、神靈魂、音化顯現の神核、不思議なる、光である』と申されてゐます。それについて、最近發見され、學界に於て、今研究されて居る即ち、宇宙線でありますが、之は地上生物に最も重要なもので、從來太陽光線の內の紫外線や其の他、分類されてある、太陽の光線以外で、太陽等の光線を傳ふる線であり、あらゆる物質を貫通して、放射されて居ることを、今研究實驗されてゐる、特殊な光線なりと、云

はれて居りますが、これ等非常に、似寄つて居る點がある樣に思はれます。即ち、空津日子空は宇宙、津は天津國津等にある津で、空津の日子は、大御神の御分靈を傳ふることを明らかにし、ソラツヒコのことたまの寓意と思ふと共に、太古文化の偉大さを親ふ、一端として見ることが出來ませう。

二十八、ことたまの中には我國體と吾人體とを全一體化せしむるものがある

又吾人が日常用ひる所のことたまの內には、眞に神秘的な節が多く、假令ば、神、上、髮、何れも同訓で、同じく最上層の意味を持つて居り、然も各々異なつた方面に働く、又紙、は同訓の內にも別な方面に於ける共通の意味を持て居る。即ち吾等人類の上に、最も大切な言語文章其の他一切の事柄を記錄して保存する事及び、報道に任じて居る。其の他包容に所理に萬般の上に、我等の文化生活に取つては實に最高の要素であつて、紙は神の如く、普遍的に働かるゝ意味に於ても肯かるるのであります。

又神代のたかあまはら、原は元始、源の意味もありますので、諸々のものが、發生の場所でありまして、日の大御神の靈質の御分靈が、地の蘊釀と、アシカビの働きに依つて、月の大御神及び、諸神靈の、生成化育のもとに現れませる、人祖に源を發し、畏れ多くも、皇室の御祖先も吾人の祖先も、一元の御祖に始まりし事が、我國體の根元本質であります。今國體の本義を、ことたま、に訪ねて、卑近の例をあぐる樣ではありますが、我等人體各局部の名稱のことたまから考へても、ほゞ同じ一元の御祖に歸し奉る樣に、考へられるのであります。

○大神から創生人祖に給はるへソ

天つちの　初の人の　むかしより　へそはこのよの　しるしなるらん

○人類創生はみな一元の大御神

かへりみて　へそのすかたを　思ふかな　たかあまはらの　もとつ大神

先づ人日神でありますが、これは日十といふことから出て居る、ことたまであると申されて居ります。このヒは、ヒフミヨイムナヤコト、といつて、神文加曾歌に於ける、冒頭の言葉で

あります。又トは十でありまして、十文字の縱横の線は時間と空間を象徴されたもので、宇宙一切をしろしめす、大神の御印であります。キリストの十字架や、佛敎の卍等も之より發して居つたことと思はれます。ヒト、フタ、ミイ、數言葉のその初頭にも呼ばれて居ります。實に日神は、日に始まつて神に納まり、亦日の始に歸りては數になる。平素の言葉の內にも斯くも明瞭に、我等は、日の大御神の御裔であることが、示されて居りまして、實に日本人のことばは深遠なものがあります。而も日本人にしてはじめて感得される次第であります。

それから頭といふことたまを考へて見るに、アといふ音は、アマに通じ天であります。タマは圓い、人體の天上にある玉といふことを意味し、天玉といふ事であると申されます。さてこのアタマは、人體に於ける最上位で、智、情、意、其れ等發着の港であるのみならず、生活上の資料を吸收する、本營であります。丁度天體に於ける日も丸く、而して地上生物一切を生成化育され、又は新陳代謝等を司宰される日輪は、宇宙に於ける太陽と云ひ、月は太陰と申されます。故に日、月は陰陽共に自然界を代表される、地上一切の生物にとりて、大なる意味の天玉であると申しましても、何等支障も見ないのであります。

○こじつく　古事につく　言葉のもとや　日の本の　みおやの神の　御のりなるらん

亦首、久日、久しい日といつて、過去、現在、未來、永劫、久遠に及ぶ、其の日でありますから、我等日の本の皇室は、其の太祖は日の大御神に發祥し給ひ、三界に亘つて仰ぎまつゝてをる。宇宙に於ける日は、我等及び一切生物に取りての至上、洵に久方の日でありますから、久日といふことたまを思ふ事が出來るので、人體に取りては、絕對の久日であります。

咽喉野戶でありますから、野原の入口の戶の樣に思ふ事が出來ます。胸は宗・棟・峰等に通じ、腹に達するのであります。其のはらは低い原ではなく、高い所のはらでありませう。神代の祖先神人發祥のたかあまはらは、いかにも高原であつた樣に思ふ事が出來るのであります。即ち原は腹に通じ、其の中心にはヘソが存在するので、其のヘソは、日祖に通じてゐる。實に之れ神秘的なる遺跡ではありますまいか、其のことたまの因つて來る神韻は、實に我が國體と完全に一致するといふ、我等日本人は先天的に、日の大御神を尊崇する、この觀念に基くものであつた樣に、思ふことが出來るのであります。

○ヘソは日祖也

人の祖は　日の大御神　わかヘソは　日祖ことたまの　うつりなるらん

二十九、高天原と日祖之原と我等は一元一如也

前にも申述べましたやうに、抑も人類發祥の場所は高天原、其の高原に、日の大御神の靈質の御分靈が、蘊醸久しうして現れませる、創生人祖の吾人は後裔であります。さて、ヘソとヒソとはことたまに於て相通じ、ヒソは日祖でありますから、即ち日祖大御神、祖神であります。又祖神の高天原と、人體の腹とは　ことたま　に於て相通じ、人體の腹は吾等發生の處、之に據つて案ずるに、國體の意義と人體の意義は一元一如でありまして、この兩者相關の眞意を日祖之原として奉賛する次第であります。この觀念を高調することによつて、根本的に民族精神を作興することができ、やかて全人類をして、その一元に歸せしむれば、玆に始めて世界の大平和は確立するのであります。

三十、「古事に附く」ことたまは、我等が言語創生以前の思想史料の一參考

○日の本の姿

ことたまの　古事につくこそ　日の本の　御國のすかた　偲はるゝなれ

玆に於て、古い事に付ける、玄妙なる、我が國の、ことたま、言語の發生を推理臆測して、即ち古事付(コジツク)る、其言葉の寓意もおごそかに、了解することか出來ると、思ふものであります。

三十一、神國の威嚴を示すに充分なり

又近世に於ける、我國民歴史の一例をあげますれば、彼の弘安四年には、元の國のコツビレ

ッが、兵十萬の大軍を以て來襲しましたが、その强力なる外敵を、然も寡を以て瞬く間に、殆ど全滅せしめたる如きは、人類創生の國家たる、神の國の威嚴を示すに充分であります。又川中島の合戰、曾我兄弟の仇討、忠臣藏等其の何れを見ても、潔い勇氣を持ち、高雅なる士風は、日本人らしく、生きて居るのであります。而も後人をして三思せしむる、尊い敎典であります。

三十二、經文の素讀は庶民には解りがたい

さて中古より外來思想の惰力的遺風ではありますが、佛壇の前で六ケ敷い御經文を讀むのを聽いて、庶民がどういふ意味の事を讀み上げて居るのか、さつぱり解らない。希くは普通用語で誰にも判る御經を讀んでほしいものである。また敎育の普及して居らぬ、常識の程度も低い時代とは違ひ、日に新たなる今日に於ては、一般の知力も發達し、疑問を起す資質も供はつて居りますから、只ありがたいと考へさすことは、國民の判斷力を痲醉させ、反つて墮落させる結果となるのであります。

過去に於ける、宗敎宗派の大方が取つて來た、回り遠い說き方や、文章技術による粉飾、懷疑、恫惕等で、一般は迷信に陷り易いのであります。即ち釋迦や、キリストを、絕對かの樣に或は巨人主義、偶像主義、奇蹟主義を以て、神靈、幽魂、又は眞理等に結び附け、或は錯覺を與へて以て、道義心を作興せんとして來た事は、今は反つて盲目愚昧に陷れる以外、恐らくは何ものでもないではありませぬか。

最早今日は、理化學上の新元素も參加し、放射能や、ラジウム、電波、磁波、高周波、低周波等の應用、又宇宙線も問題に登場する、一方何百度といふ、高熱度主義から、最近にあつては急轉向し、低溫主義に移りて、零下百八十度から空氣を液體化し、動力其の他に應用されて居る。其の他印刷術及び交通上百般に涉り、其進步が、急速度を加へて來た今日、精神の作興を圖るに當つては、現實に即して根本を究め、以て學問の上から、眞理を求める外に道がないと思ふものであります。

尙今社會の一部には、尊貴なる國體を看板にし、唯神論を笠に着て、何事かを强いんとするものなどもあり、かくの如きは、最も憂ふべきものにして、其の罪三族に價すべきは勿論、これ等の輩出は、一面國家社會組織上の缺陷でもあるが、要するに、これ等は皆、この眞理を等

閉に附した爲に外ならないと、痛感するものであります。

三十三、眞理は側近目前到る所に充滿せり

吾人は眞理を求むるに、其の様に六ヶ敷く惱まなくともよいと思ひます。まづ己れの現在に因つて反省して見れば、側近目前到る所に、眞理は自ら充滿して居るのであります。實に國體の本質と吾等民族の遺風から其の精神を考へて見まするに、如何にも幽玄神秘なる國柄で、我國體精神と、人體に於けるヘソ、ことたまの、如何に密接不離の關係に置かれてあるか、この玄妙なる大眞理を、把握すればよいのであります。

○大和魂

日祖之原　あふく祖神そ　ゆるきなき　礎まもる　大和たましい

三十四、日本文化は全人類の指針

人類社會に於ける地上天國を希つて、我等は實に創生民族其の直統であることを銘記し、大和民族の持つ、一切の美風を高調し、延いて日本國體を明徴し、日の大御神の一系であらせられる皇室を奉戴し、一切の哲學宗教、を超越し、東西古今の文明を融合すると共に、精神と物質の綜合歸一を以て、吾等日本人の天職を自覺し、日本文化をして、全人類に理念せしめ、昭和聖代に生を享けたる、幸福と名譽とを全ふせんとするものであります。

洵に日に新らしき、潑溂たる明朗さを以て、其の目的を達するために、吾等同志相闘り、茲に『太古史實研究會、日祖之原奉贊會』を創立せんとするものであります。

大方の諸賢奮つて御贊同あられんことを。

かむやまと皇紀二千五百九十五年六月謹んで誌す。御贊成の人士は左記へ御一報を乞ふ。

東京市板橋區石神井立野町（中央線吉祥寺下車）嵐田方假事務所へ

三十五、本會の研究すべき內容目的

のりことば

一、思想國防の萬全を期すること。
二、國體の徹底的明徵を期し、太古史實を研究發表すること。
三、五十一音の內三箇の重複文字を削除し新文字を制定すること。
四、發音の組織と其の文字構成の合致する天日靈文字を學校教材として用ふること。
五、國字問題の將來を定め、天日靈文字を以て其の解決を期すること。

以上。

三十六、全人類の共存共榮は日本精神なり

我等は祖先以來、其の理想は、全人類の、共存共榮であるが、常に省みて、自らの修養にいそしみ、一度己れの、なさねばならぬと知る時に、斷じて之を行ふ所の國民である。我國過去の文化に於ては、其の發祥頗る古く、而も中古以降は、支那や、印度や、歐米や、即ち世界のあらゆる、文化を擇り入れて、その特色を發揮したるもの、是れ日本文明である、何れの國家も外國の文化に、其の接觸を持たないものがあるまいが、日本のやうに島國であつて、血族の統一と、あらゆる特色を保ちながら、世界全般に涉る文化を、かくも飽く迄抱容し盡したる國は、他に見ることは出來ぬ。然し弊害のあつた斷面はこゝには申し述べませんが、今や我日本は、東洋に於ける總括的代表者であるのみならず、全世界に於ける文化の指針者を以て任ずるものである。更に一切の特質を抱容し、調和し、玉成し、精神的にも、物質的にも、自他共に認容して、世界の中心となり、利己にのみ走らず、己をよく省みて、共存共榮を旨とするのが、實に日本精神である。日清、日露の兩戰役を經て、臺灣、樺太、朝鮮が我版圖に歸してより此の方、日本の政策は、各々其の特質に對應して、其の國土及び其の民族の繁榮幸福の實を擧げ來つてゐる、更に昭和六年九月十八日、獨立滿洲の創生に當り、支那軍閥及び馬賊の暴逆から、彼の國の良民を救ひ出して、今や五族の樂土に化せしめたのも、日本精神に外ならぬ。

○開闢以來

あめつちの　はしめからなる　君か代は　日に〳〵進み　月にさかえん

三十七、歐米の物質文明は自壞作用を起しつゝある

一方輓近我工業品は、世界市場に安價良質を以て活躍してゐるが、歐米諸國に於ては、自國産業の一大脅威なりとし、到る所に自由貿易の原則を無視して、不自然なる關稅障壁を設け、これに妨害を試みて居るのである。

然るに彼等の物質文明も、今や漸く峠を降りつゝある、到る所の殖民地は、今は往時の如くに、母國に都合好き、其等工業品の御得意地にはあらず、從つて、これ等地方より、原料品の買入も自然衰退せざるをえず、今は共に困憊の止むなき實狀である。其の因つて來たる根源をなすものは白人自身の蒔いた種を、今や自ら刈取らねばならぬ時が來たのである。彼等は常に其優越を以て自ら任じ、物質的利己主義を以て、殖民地諸民族を操つた結果終に、其の對策を誤りたるものとすべく、之を要するに、彼等の物質本位に據る利己主義は、今や完全に醜骸を暴露せんとしてゐるものである。かゝる現象は現在の歐洲諸國は、彼等自體に依つて自ら其の分解作用を强行せんとして居るものと觀ることが出來る。

三十八、唯物論と新學說

最近彼の新らしき物理學說が、物質其のものは、どこまで分解しても、即ち物質であるといふ、從來の信條を、根本的に訂正して、物質とは元來、形のあるものではなく、單に一種のエネルギイの働きが、形にあらはれたるものに外ならぬといふことが立證された。

左樣であるから、物體は一切コロイド化して分子となり、電子となり、エネルギイとなり、生命力となる。換言すればこの物質とは、精心であり、心であり神である。故に從來さしも、全勢を極めた所の唯物論は、今は完全に、物理科學上それ自身の手で、自壞してしまふたといふも過言ではない。

三十九、精神と物質は萬有一元の大原因たる大創造の大祖神である

實にこのことは、取りも直さず既往に於ける、根本的の大問題とされてあつた、物心對立の如きは最早過去となつたのであつて、今は遂に正しく萬有一元の大原因たる、大創造の大祖神であつて、とりもなほさず、天照日大御神に、歸し奉つたといふことであります。

○物と心と究め
目にも見え　心にも見ゆ　あるものを　學ひ究めん　やまとたましい

四十、全民族の發祥地は日本帝國なり

我日本帝國が、今や全人類の光明たらんとする、最も尊貴なる存在である。何となれば、世

界の全民族が、發祥の國土であり、即ち我日の本は天國といはれ、太古にありて、天津國といはれしは即ち天國の意義であつた。又總本家、棟梁の國と呼ばれて居つた。それは、畏多くも皇室の御祖先は全人類の共に祖先とする所の一元の日の大御神であらせらるゝからである。

四十一、近世史上稀に見る日本の發展は我が皇室の尊嚴無比なるに因る

今より三十年程前、歐洲邊を旅行した日本人が、ベルリンの眞中で、其の地方の人と、パアの等で親しくなつて話しかけられた時に、君はどちらの人かと尋ねられて、日本だと返事をすると、向ふの人は町であるか市であるかと問ひ返へした程で、彼等には其頃、東洋支那の一部位にしか思ふて居らなかつたらしいと其の當時の土産話によく聞かされた。然るに最早今日に於ては東洋の日本か、日本の東洋か、きぎらう程に其の存在を明確に全世界に示す樣になつた。

○革新の明治聖代

あきらけく　おさまる御代の　みひかりは　とつ國までも　神代なからに

この偉大なる我が國の發展に就ても、我等は直ちに　我皇室の無比なる、尊嚴を拜すべきである。

實に萬有一元の大御神の御裔なればこそと、畏れかしこむ、次第であります。

四十二、日本國民に與へられたる使命

日本人として我等は先天的に、任務の重大なることを自覺し、各自の立場に於て夫々、日本精神を基礎とし、忠君愛國、天職に精勵、進んでは全人類をして、平和の光りに浴せしめ、神の國の神業達成に努力すべきではないか。

我等は玆に國民全體一人殘らず、一大奮起、最も强固なる一團となつて、我國體の絶對性を徹底的に明徵して、其の信念を發揚すべきであるが、先づ以て各自の實踐躬行より始まる。其の手段方法は、太古史實研究に據り我國體の再認識をなすことにありと、絶叫して止まぬ。

實に我が帝國は開闢以來、最も光輝ある歷史を有して居るのにも拘はらず、これ迄の研究は動もすれば、根本を正す事に不徹底であつた。又我國體の史實を解釋するに、外國文化の思想を以て、判斷された樣な事があつたから、今日の行詰りを來した。

最近左翼から、轉向した青年等の、其の左傾した原因を究むるに、一樣に國史教育の缺陷に歸して居るといふが、如斯事は當路の人々の、よろしく三思すべき、事柄ではあるまいか。

四十三、日本文化の世界的進出に當つて第一に反省すべき問題

今や偉大なる日本文化の研究とそれへの注目は、世界的になつて來た。この氣運をば取りにがしてはならぬ。然るに翻つて其の研究入門に必要な、根本となるべき日本語の基礎の役割に在る所の五十一音が本來我が文化の頗る深遠なる特長であるのに、假名記號の不用意が圖表組織の缺陷を來し、日本人でさへも發音に困難を感ずるやうな現狀であるから、元より語韻の異なる外人が、最も困難とする發音を學ぶに、その基礎となる五十一の發音が、一々符號式に其

の發音を習得しなければならぬ。この場合、最も大事な五十一の音圖表に大いなる缺陷がある。それは三箇の同一文字を重複掲載されて居ることである。然も全般の上に於て發音上の組織的構成を示して居らぬから、五十一音箇々の發音が、一層六ケ敷くなつて居る。これ實に日本語の研究入門を困難にする大なる病根であると思ふものである。そこでこれを解決する方法を考ふる事が、最大の急務であらねばならぬ。

○兒童と言文

はしめ子等　學ふこと文　なほくして　清けきねいろ　ゆめ忘れめや

四十四、五十一音圖表の補正すべき三箇の重複文字

却說玆に日本文化上の根本的重大問題は、現在の我初等教育に於ける五十一音圖表に三箇の重複文字を、理由なく配列して、小學兒童にまぎらはしき、發音を強いて居る事、今アイウエオ、五十一音圖表に依つて、發音を學ぶに當り、一々符號式に記憶するのである。併し明確なる發音を、完全に知ることは出來ない。何となれば、其の根據が完全でない、又何等音韻の成り立ちや、發音の組織や、其の文字の構成の圖表がない、故に正確に五十一の發音を、完全に學ぶ事が出來ない。其ればかりでなく、母韻である、エイウを持つて來て、音圖表の內の異つたる子韻の場所を塞いで、同一の文字を重複に掲げ出されてあるといふ不完全さで、之は神聖なる五十一音を、昏迷させて居る證據ではないか。然るにこの缺陷と混雜とを、其のまゝ平氣で、省みるところなく、初學兒童に學ばして居るのであるが、如斯は實に稚き思想の正しき發達を沮害しておること非常なもので、未だ全き明鏡の樣な無垢の精神を自然むしばむ事にもなる。之は一日も忽かせに出來ないことで、我等は色々の意味から、速時適正な改案を定めて、これに善處せなければならぬ。

○神聖の發音と兒童

わらへ等の　清きかゝみに　日の本の　五十一言文（イツヒコトフミ）　なほくをしへよ

四十五、我が國字問題

實に駸々として進み行く、文化途上、我が國の國字問題は、識者の間に、幾多の議論を、繰り返されたるものであるが、漢字の如き表意式の文字に於ては、限りなき文化の發展に隨伴せずして、當然行つまらなければならぬことは、洵に明瞭なる事實である。

現に漢字の如きは教育上又實用上、頗る不便不利なる文字なりとの叫びが高い。然らば現在の假名文字ではどうかといふに、成る程、表音式の文字ではあるが、之は又文字の構成上全く符號式であつて、發音の構成や其の他文字として、組織的でないといふので、未だ理想的ではない。左様であるから、結局、發音の成立ちと共に音韻に則したる文字で、其の構成が合理的で、而もなるべく簡單なものであつて、加ふるに我が國の歴史的文化に則したるものが出顯すれば最も理想的なること言を俟たない。然れども是等の條件を具備したる、所謂理想に合致した、適當なる文字は未だに、發見も案出もされて居ない狀態である。此の間に乘じて世間の一部に擡頭して來たのは、即ちロオマ字の應用である。比較的以前より行はれて居るものにヘボ

ン式即ち標準式ロオマ字がある、又其れより近く、日本式ロオマ字がある。これは我國語に即した方式であると言はれ、將來國字問題の解決に迄も突き進まんとして居る。然れども之れ果して、我國の文化に即したる文字として、適正の扱ひが出來る哉否や、頗る疑問である。

○五十一言文と天日靈文字

五十一言　文わけ入れは　あひる文字　世もきよまりて　榮えまさなん

四十六、限りなく發展する文化に即したる天日靈文字の新登場

○天日靈文字

あめつちの　神よりつたふ　天日靈文字　きよめ進まん　ふみのはやしに

玆に吾人が提出せんとする　天日靈文字は其の根源が、我が國開闢の遠き神代に發し、而も

現に其の文字で、太古代の正史を綴つた文獻も、存在して居るのである。如斯貴重なるものが、彼の儒、佛、渡來以後壹千數百年間、湮滅同樣の狀態となつて居つた。今其の文字の構成組織を見るに、五ツの母韻と九つの父音の交叉により、三十七の子韻を生じてゐる。されば一見して正確なる五十一の發音が、何人にも明確に且つ甚だ容易に發し得るもので、實に組織立つた、合理的なものであつたのに驚かされる。

一、極めて素朴なること。
二、のびやかに巧妙に出來てゐる。
三、文字と發音とが極めて合理的に構成されて居る。
四、太古の時代相が偲ばれる。

○文字のはじめ

世の始め　文字の始めは　日の本の　みおやの神そ　さためたまへる

かくの如く完全に、あらゆる必要條件を具備してゐる文字を見ても、日本の文化が世界に於て、最も古き證左であつて、これを用ふれば、日本語の發音を基本的に正すことが出來る。

○五十一音

皇かみの　宣らせ給ひし　五十一言（イソヒコト）　ふみさかえゆく　とつ國々に

四十七、五十一音を明徵にし我が國字問題を解決する實行と其の順序

先づ現在の五十一音は三箇の缺字を持つために發音を昏迷し、正確を期すること極めて困難にしてゐる。今それを補ふために、即ち發音五十一を正確にするその手引として、一目瞭然たる圖表に、その組織構成を示す可きである。現在では文字も其の發音も何等構成組織的ではない、又アイウエオ假名圖表では寔に六ケ敷いのである。それがために從來幾多の先人が苦心慘憺して口の形を示して發音の基準を敎へ、又は音聲學的な理屈を附されたが、何れもこれ等は五十一音の入門者にとりて、直接には効果はない、まづ徒勞であつたと申す外はない。そこで

どうしても天日靈文字が必要となつて來る。何となれば天日靈文字の圖表に因つてこれを見れば、文字と音韻との組織構成が全く一致して居るために發音方法が自ら判明し、一目して習得することが出來る。さうであるから發音を明確にするために、天日靈文字の組織構成完全なる音圖表にアイウエオ假名を配して以て音圖表を作成すれば、從つてアイウエオ假名の發音も一目して明瞭となり、加ふるに天日靈文字も自然と普及する。其の結果は將來國字問題も自然的に又容易に解決されることとなり、これ一擧兩得どころか、その他一切の問題が解決されるのであります。

やがて天日靈文子が國字として實際使用せらるゝに至つた場合、必然的に起る問題は、之を横書にすべきか、縱書にすべきかである。

それには縱横何れにも極めて書き易く、丁度現在の日本文章が、縱書にも横書にもされてゐると同樣に、何の苦もなくすら〳〵と書き續けることが出來るのであります。

將に來らんとする次ぎの時代は、東西文化の融合一致で、この時その新しい日本文化が世界的に進出するやう、用意して置くことは吾等の責務ではありませんか。玆に於てその因緣最も古く、五十一音と文字の基礎が、合理的組織で實際上便利である、天日靈文字の活用を絕讃し

て提唱すると共に、世上の共鳴を求むる次第であります。

さて五十一音圖表アイウエオの法式と、天日靈文字に依る音韻配列の順序とを比較對照する前に、まづ母韻アイウエオの配列順序に準つて發音を試みるに、この場合、如何にも口と舌の働きが、自然の順序に合致しない。例へば、アと口頭を開き、イは舌を下腭の齒に付けて口を開く、ウは口先を突き出す、エは口を半ば開く、オは口頭を窄めながら突き出す。

斯くする時に感ずることは、その順序進行が行きつ戻りつ、さまよふてゐる樣な感が起るのであります。これを天日靈文字の圖表に依れば、アエイオウの順序であるが、この順序に發音する時は、自然的になごやかなもので、洵に終始一貫なめらかに口舌の働きが進行するのであります。又父音の場合クスツヌフムユルウは從來のものであるが、これを新圖表によるクスツフムヌルユヌの順序と對照する場合は、發音のリズムは母韻の場合と同じ相違の感を繰り返すものがある。この點に傾注せられんことを希ふものである。

四十八　神代天日靈文字及五十一音圖表

現在五十一音圖表（但シ。印發音は別表アヒル文字參照）

アカサタナハマヤラワ					
イキシチニヒミ・リキ					
ウクスツヌフムユルゥン					
エケセテネヘメ・レエ					
オコソトノホモヨロヲ					

本表の内レ、エ、の二字は大矢透氏著の『音圖及手習詞歌考』中のものを借用したるものなりゥの一字は著者の試案也。

太古は五十一音の文字確實也、現在アイウエオ假名四十八字の外三欠字の制定と、天日靈文字に因る音韻の明徴を期す。

我國體は人類發祥の國土を有し、世界文化の根源を極む、實に五十鈴川は、五十一言文（イソヒコトフミ）にして、今之を舊套の學派に泥まず、固陋の見に陷らず、新奇を競ふが如き事なく、清く、正しく研究すべきである。

神代天日靈文字及五十一音韻表

母韻五字	子韻三十六					運字一
ア	カ	サ	タ	ハ	マ	ナ	ラ	ヤ	ワ	ン
イ	キ	シ	チ	ヒ	ミ	ニ	リ	・	ヰ	
ウ	ク	ス	ツ	フ	ム	ヌ	ル	ユ	ヲ	
エ	ケ	セ	テ	ヘ	メ	ネ	レ	・	ヱ	
オ	コ	ソ	ト	ホ	モ	ノ	ロ	ヨ	ヲ	

父音九字、子韻三十六字、運字一字

四十九、つめことば

(一) 活性の素

今の世界の國家社會に於ては、如何に强固の獨立國家を圖つても、然も單獨に自分の國だけの安全平和は、到底望み難い。さりとて國家も一種の生活體であれば、他の國と無關係にして靜止する事は出來なく成つた。

我等は、幸ひなる哉、實に宇宙を貫く大眞理と、其の根本に徹底したる、明快な精神と、それにひつたりと合致する現實が、尊くも存在されるのであります。

故に我等の理想も、現存實在に基く事が出來るといふ、他民族が味ふ事の出來ない、尊い精神を持つて居る、仕合せな國民であります。日常仰ぎ見る太陽の如く我が皇室を中心に今や壹億の民草が全く整備されて、根本の尊き精神に一致結成すれば、如何に全世界の十六億諸民族といへども、ともに永遠平和の朗かなる新らしき世界に、蘇つて共に榮えるといふ、境地に達することは、敢へて難事にあらざるべしと信じます

如上の目的を達するに當つて、我等の執るべき方法の一端を更に云ひ代へて見ませう。たとへば一家の事でも、一國の事でも、己れの氣持に於ても、其精神を整ひ外に向つた場合、驚く可き力となる其の分類要素として、凝集力、結合力、團結力と一方、分散力、宣傳力、發展力、等が關連綜合して、常に潑剌たる氣力を充實する——之が、最も必要であると思ふものであります。然らばこれ等、活性の素は何に因つて求むべきか、それは、萬有一元の日の大御神に基く、文化の元を極め、學問や歷史に因り、强固なる理念の上に、確固不拔の基礎を求むる外に、道がないと、斷ずる次第であります。

かむやまと皇紀二千五百九十六年一月十五日軍縮會議脫退を記念し謹みて誌す。

(二) 大和一體

右甚だ概略の記述ではあるが、要するに我が國は天地開闢より全民族が發祥の國家である。故に外國流の建國といふ言葉は當らない。左樣であるから現在の皇紀は建國の皇紀ではない筈である。神倭朝でありますから、即ち『かむやまと皇紀二千五百九十六年』とすべきではありますまいか。

又渡來民族說の起つて來るその觀念は、即ち天孫降臨の說等もその一因となつて居るものと

思ふものであります。これも注意すべきものではありませぬか。

更に云ひかへれば我が國家發祥の史實を明確にすると共に、我が國の五十一の音韻を明徴にする、又一方我が國獨特の言靈ことたまを溫ねて我等發祥の『古事につく』これ實に自分等それ自身が直に完全に尊き我が國體と一致する國民であることを自覺する必要があります。それのみでなく四海同胞の意義を明瞭にし、つまり全人類の融合である全世界が大和一體をなすものである樣にせねばなりますまい。

五十、感想と其の感想

(一) 念を入る

本書の問題が問題であり、其の本質は極めて重大である。私は本書を草するに當り、先づ以て己れを慎み、實に文字通り齋戒沐浴の氣持であつた。然し從來一般識者の持たれて居つた、祖國日本の觀念とは、可なり大きな隔たりがある樣に思ふから、奇矯の言は可成差控へた積りである。

たゞかくも光輝ある日本であれば、我等同胞は、在來の樣な、甚だ不徹底な國家發生の歴史を基とした日本精神ではありたくない。又このやうな大きな事實は、自分丈けで承知してゐても本統の意味とはならない、よろしく世界に分散する日本民族が、一人殘らず一致して納得の出來るやうなものでありたい。この意味に於て、讀者諸兄に御願したいことは、此際一切不安な氣持を捨て、極めて平靜に、ある種の流行を追ふことなく、昂奮、發熱、發作、に驅られず篤と本問題を攻究し、過去二千年來冒し來つた日本精神の錯誤から自らを救はねばならぬ。

(二) 人類の本質

右の文を書いた丁度この時二・二六事件が、湧發し、今其の急報を得た。實に若し我等國民が一歩を誤たば、我が國家は浮沈に關する危機、內外の情勢油斷ならぬものがある。

又社會の一部には鬪爭の爲めにする鬪爭もあるといふ。そういふ人等には立派な大義名分のある事でも、其れを强いて考へ樣とはせず、窮極の目的やその到達點等、六ケ敷き事は自分だちの知つた事ではないといつた風に、わざと無關心の人もある。又極端な個人主義の說もあつて、人間の生活は一切鬪爭であつて、尙且つ最後の目的でもあるかの如く、これ人類歷史の證明する眞理ではないかとまで放言し、人間一部の斷面を見てその本質を論じ、人類の鬪爭もつまり一種の野獸性であるとなし、一般動物と共通したる性能を以て論斷せんとし、强いて人類の持つ本質本能であるとなすが如きは、我等日本民族、否世界全人類に對する大なる侮蔑ではないか、吾人これ等の說を斷じて容認する事が出來ない。其れと同時に吾等全人類が悉く共通であり、眞に本能であつて、常に向上發達を欲求するところのものは全く別に存することであります。

(三) 眞　善　美

吾人が萬物の靈長として、自ら任じ、魂魄、知識、感情を包含する精神を持つて居る。視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺、この五感識が絕へず、眞、善、美を愛好し、自在に言語を以て互に意識を交換し得る所の官能が一切整備するもの、これ吾等人間であつて、一般生物に優る特長である。故に其れを愛好する本質本能こそは、眞、善、美、ではないか。常に我等はその欲求に向つて、營々としていそしんで居るのである。

或はこれ等本能が求むる手段の內の一つとして鬪爭を起すこともある、競走もする、戰爭もあつた。其れは飽く迄、目的の爲めの手段であつて、鬪爭のための手段ではない筈である。いつの場合でも明瞭である、たとへば九、一八、でも、五、一五、でも、相澤—永田でも、今度の二・二六でも、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、其の他日時を經るに從つて何人にも判明される、過去の歷史は其れを雄辯に物語つてゐる。即ちこれ、眞、善、美の目的を達するためには色々な事情で、敢然と進む時、其の障碍を取除くための運動に過ぎないのである。玆に於て我等の眞、善、美について吟味するに、我國には大御神より傳はる實に貴い三種の神器があります。畏れ多い事ではあるが、御玉、御劍、御鏡、其の個々の何れの一つにも、眞、善、美の意味が明瞭に拜する事が出來ると共に、三、三、九の數を思ふものであります。故あるか

な彼の上代の言葉に、天の增人法といふことがある。今其の第一條の如く行はれて居るのは、彼の結婚を行ふ場合、人生の新たなる門出にあたり、御神前に於て、三三九度の誓ひを立つるならはしは、神聖なる三種の神器の意味を以て、人生の指針を誤またぬために、其の眞理を示されて居ることが解るのである。これを省みたならば、尊きこの不文律こそ、日本民族の大なる誇であらねばならぬ。

如斯人生の節度に、正しき意義を有し、吾人の頗る重大意義の式典をさへ、從來は何等說明もなく、無意識の間に於て、單なる慣習として取り行はれて居る事は、惜むべきことにして、常にそれ等の說明、普及が、必要でなかつたらうか。慣習は屢々眞意を沒却するが故に、單なる慣習にのみなづむに於ては、日本精神の偉大さも失はれて仕舞ふから、內容の意義を宣明することは、時にとつて缺くべからざることである。本書の使命も亦こゝに存する。

(四) 稻荷と居儀

さてここに序の意味でもないが、思ひついたまゝに記すことにいたしますが、

我が國神武皇紀八百年頃、仲哀天皇の朝に在つては、彼の神功皇后は、畏れ多くも御身重の御尊體を以て、當時に於ても驚く可き老齡の臣、竹內宿禰等を扈從せしめられ、新羅に遠征あらせられし事は、あまりにも有名な史實であるが、現在の吾等が、今之れを何と見奉るか。其の信念とこの勇氣とは、我が日の本は神の國であり、親國であるといふ威嚴の程が見得るのである。即ち親が我まゝをする其の子に接する如く、腕力の强弱は問題であるまい。當時支那大陸はエダナクニと云はれ、支國であり分家の國に臨まれし事であるから、今其の氣品の程を偲ぶ事が出來る。

應神天皇の御時代に於ては、秦の始皇帝の裔融通王が、百二十七餘縣に及ぶ眷屬壹萬八千餘が亡命し。又後漢靈帝の裔阿智王が、十七縣に涉る眷屬と共に歸化した。現に九州には阿智王神社が存在されてゐる。又三國時代魏の國の文帝の裔安貴公も多數の人と共に歸化して居る。又朝鮮任那に日本府の置かれた事等はあまりにも明かな史實である、これを以て見るに、我日の本は大陸の諸國に於て、如何に尊敬の的であつたか、神の國に行けば安全である、つまり親の懷に抱かれし如く、安心して亡命して來たのであつたらう事が、想像に難くない、之を思ふて今又竹の內古文書にある、神武天皇以前の歷史に於ける、太古の世界に於ける天國なる天津國であつた、我日本は、棟梁の國、オムヤの國、と云はれし模樣を、明瞭に思ひ浮べる事が出來るのである。

今　皇祖皇大神宮には、內宮、外宮として祭祀せられて居る事は何人にも知られて居りますが、其の外宮は往古　別祖と書き示されて居りましたが、御祭神は太古、

スミラミコトの第二代
造化氣萬男天皇
造化氣萬美皇后　より發し給ひし、

萬國各民族の祖神、五色人の祖
盤支那弟清民王
盤支那黃美民王

外あまたの尊だちを、それ〴〵全世界の主要地點に分散派遣あらせられ、其のまゝ其の地に『居倣』になられ、其の地民族の祖を成して居られた。故に其の後代に於て棟梁オムヤの國に大陸から亡命せられし事ありとしても、其れは祖先の發生された、本家に歸られたも同樣の氣分であつたらう事も想像に難くない。其れも多數の眷屬と共に親國に『居倣』になつた、其れで、

別祖……外宮神宮、豐受『居倣』明神と申し上げ繁昌の神として、國民の意識に潛在し、自ら崇敬の的となつて居るのも故ある哉である。又後代に於て、彼の支那國より大擧して亡命し來りし場合、同一箇所に集合團體を形成せしむる事は、政治上さだめし不可とされたであらう關係から、各地に分散居住せしめた結果、今日各地方のエダ種族を傳來せしものと思ふ事が出來ませう。

之れを要するに、我國體こそは、世界全人類の祖國たるは勿論であるとなされ、故に

『神倭皇朝十代ミマキイリヒコイニエ、スミラミコト(崇神天皇)御即位六十年九月一日詔して天越根中日見日高見神明、日神宮、御皇城山月神宮、萬國五色人祖根之神、棟梁皇祖皇太神宮、縣族四社の內、五色商運神社を改め別祖神宮と勸請し祭る。祭神五色人祖九十八柱神祭る。神主武雄心命勅使大彥命、丹波道至主命、吉備津命、武淳川別遣命、天皇萬國內平定祈り祭る。以下奉略。』(太古日本史ヨリ)

天神人祖一神宮＝＝皇祖大神宮
別祖神宮＝＝＝＝＝＝外宮神宮

敬の目標である、自らその要素の具現も又充分であると思ふ次第であることを、謹みて誌す。

（五）　マルコ・ポオロ

マルコ・ポーロは、西歴一二五四―一二二三、皇紀壹九壹四―一九八三、即ち鎌倉の北條時宗時代である。伊太利ベニスの人、父をニコロ・ポオロといふ。マルコ・ポオロは父と共に陸路より支那に入り、元の世祖忽必烈(コツビレツ)に仕へ頗る優遇を受けたり。かくて支那に留まること十七年(或は十九年といふ)。其の間アジアの各地を旅行し到る處の地理、風土、民情等を實地に見聞せり。さて世祖の妹がペルシヤ王に嫁するを送りてペルシヤに到り、ついて伊太利に歸れり其の後マルコ・ポオロは『東方見聞記』を著して、世の好評を博せり。『東方見聞記』には、支那、マレイ群島、印度洋沿岸地方の記事多し。就中支那に關する記事には有益なるもの多し。又日本に關する記事もあつてそれによると、支那の東方海上にジパング(日本のこと)と稱する島國ありて到る所に黄金を産し、國王の宮殿は純金を以て屋根を葺き、黄金のテイブルを用ひ殆んど黄金は無盡藏と頗る誇張されたり。當時の歐洲人はマルコ・ポオロの東方見聞記を讀みて『黄金花さく東方の國へ』と、一時に東洋熱が非常にあふり立てられた。とあつて、其の結果、新航路の發見やまたは彼のコロンブスのアメリカ新大陸の發見等を見るに至つたとされて居る。これ等は比較的近代のことであるが、この時代に至つても、大陸方面に於ける思想に於て、日本に對する暗示的憧憬のその流れの底の深かつたものがあつたらう事も想像出來ると共

に、當時コロンブスの壯圖が頭初よりアメリカの新大陸發見が目的ではなく、途中偶然の出來事であつて、眞の彼が目的は彼等からは天國のやうに思はれた、我日本を目標としての企圖であつた事が何人も思考する事が出來ると思ふ。

(六) 吾人の任務

法學士　關　義　一　君

現代の日本、否現代は個人については生活の不安、國家に於ては、經濟的に又思想的に大いなる不安に襲はれて居る。

現代人は此の現實の難關を前にして徒らに控手座視すべきではない。

吾人はすべからく、現代を超越せざるべからず、併りである。併し吾人は現代に生きて居ることは事實である。

我が國有史以來、幾代となく幾多の難關に遭遇し、幾回となく試練を經て來たことは事實である。

併し現代のあらゆる方面に存在して居る、惱みは、從來の幾多の難關とは比較にならぬほど大いなる惱みである。

現代は政治的にも、經濟的にも、本當に早く解決せねばならぬ、大いなる宿題を吾人に課して居るのである。

我が國、有史以來、國家的に見て幾回となく侵略行爲を受けたのである。併し最後の一瞬に於て此の難を免れて來たのである。

吾人はよく此の事實を凝視する必要がある。何物か日本に他と異つた一種の力が、潜在して居るのではあるまいか。よくこれを研究する必要がある。

併しながら此の研究にあたり、可なり大いなる困難がある。と云ふのは現代に至るまで、幾多の外國文明が渡來し、幾度となく、自らを忘れて外國文明に溺れた、時代が多かつたのである、殊に鎖國以後ペルーにより外國と交通した、當時は最もひどく、外國文明に溺れたのである。

かくの如く我が日本は色々の着物を着て居る故に此のベールの底に流れて居る、何ものかを摑まんとするに、非常に困難を感ずるのである。

現代はあらゆる方面に於て行詰まつて居る。社會主義もよからう、又共產主義であつても。併し何をおいても、我が國の何たるかを知らねばならぬ。

我が國の底に流れて居る、何物かを把握せねばならぬ。

其の研究によつて、他の政治形態、經濟組織の何ものであるかはつきりと理解されて來るのである。

併し此の日本の本源を、發生的に研究することは、最も困難とされて居り、むしろ不可能とされて居つたのである。

、殆んど其の文獻といふ物が無かつたのであり、保存されて居つても、湮滅してあつたのである。

併し偶然と云はんか、こゝに喜ぶべきは、其の研究に最も良き指導となる、無類の文獻が現存して居る事實である。

種々の事情により公にされなかつたのであるが、目下某所に厳重なる保護のもとに秘蔵されて居るのである。

僞物でないことも、幾多の人々により證明されて居るのである。

吾人の任務は大である。

吾人の進むべき道を知らねばならない。

吾人は光を見出さねばならない。

竹内古文書として存ずる文献は、正に以上の要求に應じた唯一の物である。

先づ吾人は第一に此の文献の研究に當らねばならない。

（七）トドロツヅミ

右の御意見に對し、著者として一言申述べます。既に本文にも一寸書きましたが我が國の、ことたま、日常知らず〳〵用ひる言語であるが、發生された當時の思想や精神の原因があつた事は、當然論をまたない。然るにそれが自然に原始的歴史の思想を物語つて居るが、これを以て見ても如何に國體の淵源深く、其の古事につけて寓意を臆測すれば、忽ちにして、大祖神の開闢、皇室、國體、日本人として我等の五體及びその部分が、國體とその原因要素を寓意され物語られて居る。而してそれが世界の全人類にまで、大和一體する、その重要な注意を喚起せられん事を、よろしく、とどろつゝみの、たいこ、太古を打鳴らして、祈るものである。

（八）漢文と記、紀、

警視廳吏　鶴岡　技川君

貴稿謹而、直に、否、眞に文字通り一氣呵成に讀了しました。

上代史並にアヒル文字を通じて日本の全き姿を國民に知らしめて此光輝ある國土に崇厳無比なる、御皇威の下に安樂に生を營み得られる喜びを、一層新たならしめて、日本國民としての、光榮ある眞の姿を同胞に正視せしめようとなさる貴下の御努力に對して大いに敬服致します。

以下本を讀で思ひ浮べたことでありました。

（一）一〇、漢意と佛教の余弊が日本固有の神代文字を認めないのであつたか、この章に就て『其の證據に見得る古事記、日本書紀云々より、……漢意の人等には考へられたのではありますまいか』云々と述べて居られるが、右に對し異なる說があるやに記憶してをります故聊か思ひついた儘を述べて見たい。

勿論自分は未だ、特に日本書紀編纂當時の社會情勢に就て、何等詳細に研究せる事はありませんから、はつきり申上げられませんのは遺憾ですが、併し下記の如き說があり、

夫が又最も妥當らしく考へられるのであります。

即ち日本書紀を特に漢文で編纂したる理由は、當時支那との交通開けて彼我の間に色々の交渉が行はれた事は想像に難くない。がまだ、日本國の歴史と云ふものに就ては、支那に於ては

どうも理解に乏しい、即ち認識不足の點が多々あつて、何かにつけ國交上に不都合な事があつた事と信じられる。

斯うした無理解認識不足を是正する爲めにはどうしても、最も正確なる處の國史を編纂せねばならぬ。さればと言つて國字をもつてしては、異國の人の間に讀ましむるに、甚だ不得策であると云ふ見地よりしまして、我國の崇嚴無比なる國史を廣く外人に知らしめて、如何に日本が立派な國家であり、國土であり又日本を治しめす、皇室は如何に神聖にして民草を愛撫し給ふ恩德の高大にあらせらるゝかを知らしめんとの意圖よりして、漢字を以て編纂せられたるものなる由を說く學者あれば、一應申述べて置きます。

即ち自己を正しく理解する事は他を理解する事なり。

(二) 又國體明徵問題について自分は最も中正なる意見を有するものである。

其故は、我日本人たるものにして我國體の上御一人を崇めまつりて我々國民の　天皇に歸屬し仕へまつるものなる事に至りては、三尺の童子と雖も此理を辨知し得ざるものはあらざるべしと信ずるものなればなり。

なんとなれば、日常自己の職にいそしむもの或は學校に學ぶものは、皆自己の職分を完全に

盡す事が、日本國の榮光を增す所以であり又しかする事が、上至尊の御高恩に酬ひ奉つる所以であると、心に固く信じて夫々の道に一意進みつゝあるものなれば、今更一個人の說く一學說などを過信するが如き愚者は、中正を重んずる、日本國民には斷じて一人も非ざるべしと吾人は信ずるが故である。

されば明徵問題をかつぎ廻る諸公よ。

諸公の頭よりも、一般國民の方がもつと、しつかりと土に足をつけて居る事、又國體の崇嚴無比なる事を、明徵に理解し居る事等を能く〳〵考慮せられよ。

以上二三の思浮べた儘を書いて見ました。書生論として一笑に附されたい。

(九) 漢字萬能

以上の鶴岡枝川氏の御說に對し、同氏の御諒解を得て、左に著者の一言を添へます。

(一) 日本書紀編纂事情に關し、何故漢文體を專用したかについての御說は、法學博士大川周明氏の『國史讀本』に於ても、論ぜられて居りますが、然し日本書紀を編纂するにあたり、或は其の以前に於て、別に國文體で書かれた物があつたとして、更らに漢文體のものも出來たといふのなら、其れ等學者の說も多少意味をなさぬこともあるまいが、其の以前に於て幾多有

力なる文書が、湮滅された事が、當時日本書紀の編者だちも知つての事であらう。然るに一切國字のあつた事を認めない、當時に於ては、今日の場合と事情を異にし、未だ印刷の術が行はれてゐない、從つて複成がたやすくない、そこで異國に對するといふよりも國内の情勢に支配せられた結果ではあるまいか。なぜならば、當時よりも百年程前に完成した彼の漢字を以て日本字に附すとある　聖德太子の物された　天皇記（スメラミコトノフミ）、國記（クニツフミ）でさへも、忽ちにして五十年も經ない内に湮滅されて居る。さうして其の頃は、大陸文化の迎合が最も盛んな時代であつて、我が國の年號の制度も採用された、即ち大化新政であつて、日本書紀の出來た、七十五年前である。これを以て見ても如何に、大陸文化の大影響を受けて居る時代であつたかは、全く想像に難くない、故に大陸に對する示威的に我國史たる日本書紀を特に漢文體を以て編纂されたといふ觀かたは當らない樣で、むしろ漢意迎合的意味の方が、多分に含まれて居つたであらうと斷ぜざるを得ない。

加ふるに我が最も深い淵源を有する國史を示すに、其の編纂に當つて、其の基礎や根據を、もとむる、確かなる文書に因らず、巷間の說や、個人の記憶を取りまとめて綴つた、而してお蔭であなたの國からおそはつた漢文も、この樣に進步上達しましたとあつては、如何に其の頃でも文獻其のものの權威でもあるまいし、根本的に、示威的の意味と視る議論は成り立たぬことになる。

而して今日我等が自分の國の歷史を學ばんとするに、其れより先に、外國語たる即ち漢文を上達した上でないと、學ぶ事が出來ないとなると、當時の漢學萬能者だちも、それらのために可なり巧妙な事を、將來の國民に强いられたものであると、言ひ得ると思ふ。

それぱかりではなく、彼の萬葉集でも固有の國字で書いてあつたならば、一層親しみ易きものをおしいものである、わざ〳〵四角張つた漢字を宛字して、遂にそれ等の漢文字を萬葉假字と稱へるまでになつた。

かくして我が國のやわらかに優美なる文字と其の文學は、堅くるしい漢字のために湮滅されて居る。それでも我が國の五十一音の音表文字があつたればこそ、國文學や、三十一文字の如きは相當の發達を見たのである。あれ丈け努力して漢字を使ひこなす位なら、もつと漢文式な文學、即ち漢詩の樣なものが、當時の和歌以上に發達してをつた筈であるのに、さうでもなかつた。つまり漢意者流（カラゴヽロ）の漢字萬能に、陶醉した人等が、丁度歐化流行の今日のロオマ字論者より層一層、强烈な惡質なものであつたらふ事が想像に難くない。何となれば、あんなにまでし

ても、萬葉假名は生れる筈がないし、がくも徹底的に、國字國文學の湮滅や、漢字萬能を、後代の吾等に、强制しなくても、よかつた筈であつたと思ふからであります。

（二）國體明徵問題についての御說は、即ち外國學の深き影響で、歷史の不備、國體、認識不足から來た、自由主義的な法律論が、機關說を生んだのであらうが、相當に信奉者があつたから問題となつたのだと思ふ。

（十）竹內古文書

本文中の竹內古文書は、スミラミコトの上代、天越根中國日見日高見赤池神明、天神人祖一神宮と稱せられしが、後改めて皇祖皇大神宮となり、常に越中立山の山下を神域とされ、雄大なる神殿に神鎭まりませる、御神體として奉祭せられしもの。宇宙大元靈を初め奉り、開闢以來御歷代の、スミラミコト、御作成の色々な御神寶及神代文字に依る古記錄、中古、應神天皇の御宇、故ありて勅命により、神宮の神域に埋藏せらる。依而神宮司武內宿禰の子孫相戒め神寶を守護し、今日に及びしものなるが、其の內宿禰三代竹內眞鳥勅を奉じて神代の古文書に漢字を宛てられしところの譯文もありて、昭和四年竹內家六十六代の孫巨麿氏が一部開封されしものより、昭和六年公刊され太古日本史の內を主として適載したるもので、

今御神寶の一切は、茨城縣磯原に奉安されてあるものである。

（十一）三脚一體

竹內文書出現の以前、富士古文書即ち徐福の十二史又は大友藤原の能直が編輯した上記等も世に傳へられしが、これ皆竹內古文書の支流にして、何れも太古の我日本文化にとつては、確かに三脚一體を成すものなる事を信ずるものである。

（十二）五十一言文

茲に竹內古文書に傳へられる內より五十一音に關するものを略載し、如何に我が國體と、五十一音が深淵にして、崇嚴味をかね備へて居るかを知ることが出來ると思ふ、即ち左に

五十一言文に關する御神名

○ 天一天柱主大神の（御時代）……

天日萬言文造主大神

○ 天御光太陽貴王曰大御神の（御時代）……

天言文形神名造根尊

萬國八意五十一言造根尊

尊萬國言語伊吹尊

スミラコト御一代

○ 天日豐本葦牙氣天皇 の(御時代)……

萬五十一言形神名文造根神

詔して言語の差別像神名文字を作らせ給ふ。

天日萬言文造主尊

天言文像形神名造根尊

萬國八意五十一言造根尊

萬國言語伊吹尊

萬五十一言神名文造根尊

天豐人形御持主尊

日人八意智謀守尊

天豐地球形圖造根尊

天日萬國地形圖書根尊

以上文言造頭に任ず（天日文字の發生）

天日字日球神の丸形字により文作を定め、像形神名字天日草體字を作り定むること、五十一字。

天日安砥墨取主尊……凝畑取り葛の油を受せ墨を造る

天日楮穀木紙主尊……麻楮木と穀木の皮を取りて紙を造る

天日岩竹圓鶴毛彦尊……筆を造る

スミラミコト御二代

○ 造化氣萬男天皇 の(御時代)……

天日萬言文造主命に命じ、上代の神々を文にし、天神人祖一神宮に御奉納。

スミラミコト御三代

○ 天日豐本黃人皇天皇 の(御時代)……

天萬言文記命

天日言文史命

萬五十一連形神名主命

萬國言語教命
天八意言文主命
天日言語明命
萬言又造教命
竹內萬事知言命
萬圖地形國造命
地球形國造命
天萬神代系圖主命

以上十一尊に歷史御編纂神宮に御奉納。

神樂を舞ふ五色人王一同五十一鈴、笛、太鼓、鐘鼓、鐘、笙笛、うちならしヒラ手して祝祭る。

スミラミコト御四代、

○ 天之御中主天皇（アメノミナカノシスミラミコト）の（御時代）……

言語差別文知神（コトバクチフミシル）

天日豐本アヒル文神
天合マチ形文造神
萬國言語學神（コトカクシヲ）
萬言像形假名文造神
天豐言明文神（アカリフミ）
天地コレタリ文造神
甘美言配文王神（ウマシコトクマリ）

以上歷史御編纂、神宮に御奉納。

スミラミコト御五代

○ 天八下王天皇（アメヤクリオホスミラミコト）の（御時代）……

天日言語教明尊
八意語學明尊
天豐言學知尊
天豐形假名主尊

豐前文珠岳に文珠の神としてあかめ奉る

以上　萬國言語長官に任命せらる。

スミラミコト御七代

○　天相合美天皇（アメアワスミスミラミコト）　の（御時代）……

天日語學教主尊

スミラミコト御九代

○　天八十萬魂天皇（アメハツヨロズタマスミラミコト）　の（御時代）……

國言商法道造尊（クニコトアキナヒホミチヲクリミコト）……（アキナイの初め）

天言合商姫尊

スミラミコト御十一代

○　神皇產靈天皇　の（御時代）……

神皇萬言知命

神五十一言文造命

天豐八意知尊

天日萬五十言文命

天日形伎文知尊

天豐歷史頭命（カウノミコト）

上代歷史御編纂その書卷を皇祖皇大神宮に奉納し給ふ。

スミラミコト御十四代

○　國之常立天皇（クニノトコタチスミラミコト）　の（御時代）……

天豐形假名知尊

天日語言知尊

天日萬言悟尊（サトリ）

天豐悟知尊

天日五十一言知尊

天日阿曰文知尊

天日萬國形圖知尊

スミラミコト御十五代

○　豐雲野根天皇（トヨクモヌネスミラミコト）　の（御時代）……

天皇詔して觀察(ママツオムトノカニ)便を以て萬國の守王(ムリオ)に文書を以て應復(オ)し復命(フヒラ)することを命じ給ふ。

豐雲生津墨尊
豐雲沫諸楮(アハナキカムノミコト)尊
豐雲紙スキ船姫尊
天之上代文知尊　アフスタン國守　に任命さる
天日球形圖主尊
豐雲形假名尊
豐雲萬國界知尊
國上代球地形知尊
地球圖形知尊
豐雲阿文知尊(アヒルフミシル)
豐雲上代知尊

神代史御編纂　神宮に御奉納。五十一鈴を作らしめ給ふ。

スミラミコト御十八代

○ 大斗能地王天皇(オホトノヂオホスミラミコト)の(御時代)……

五十一五言文知尊
五十一五連知美尊
國城文字知主尊
五十一五猛彦尊
圖造知尊
萬國圖造知尊
萬國言文知尊

スミラミコト御二十八代

○ 眞皇眞輝彦天皇(マコマテルヒコスミラミコト)不合三代　の(御時代)……

總臣思廉之田布榮彦命
五十一言文彦命
言代足太田彦命
言代弟太田彦命

萬言代萬國言明命
水押墨筆紙主命
天空浮舟造知命
海川浮舟知命
天浮舟乘知命
天地大樂舞彦命
萬國形圖知彦命
雷萬國令ヨ命

以上を以て新歴史御編纂太神宮に合祀し給ふ。

スミラミコト御二十九代
○ 玉嶋彦天皇不合四代（タマカミヒコスミラミコトアハセズ） の（御時代）……
五十鈴姫皇后（イソスヅヒメキサキノミヤ）
五十鈴委彦命
スミラミコト御八十九代

○ 豐日豐足彦天（トヨヒトヨタルヒコスミラシ） 皇不合六十四代（コトアハセズ） の（御時代）……
豐紙造彦尊
豐山田墨セエ尊
スミラミコト御九十一代
○ 豐柏木幸手男彦天（トヨカシワキサウテタノヒコスミラミ） 皇不合六十六代（コトアハセズ） の（御時代）……
天津八意五十一文知尊
萬國言語知尊

皇子二十一尊、皇女二十三尊を萬國文字言語教官に任命。

スミラミコト御九十二代
○ 春建日媛天（ハルタテヒヒメスミラミ） 皇不合六十七代（コトアハセズ） の（御時代）……
多多良五十鈴姫（タタライスヂヨヘヒノ）尊
スミラミコト御九十四代
○ 神足別豐鍬天（カムタラハルトヨスキスメラミ） 皇不合六十九代（コトアハセズ） の（御時代）……
大足五十一文字知尊

スミラミコト御九十八代

○ 狹野尊（サノスミラミコトノハヤヌ）不合七十三代 の（御時代）……

御改神日本盤余彦天皇（カムヤマトイワレヒコスミラミコト） 後ち神武天皇

新形假名 アイウエオ 五十一字を作らせ給ふ。

（十三） 世界の祖國

本書に於ては、極めて粗雜なる一端を申述べたに過ぎないのでありますが、只我が日本は如何にも明確に、人 文 發祥の姿を具有し、可なり往古は、全世界の祖國として、相當な威容を示して居つたのに、屢々偶發的天災地變の爲め、大陸諸邦にさきんぜられ、其の文化影響の結果我固有の文字を全然認めぬ迄に達し、其のまゝ永く今日に至り、非常に萎縮した日本思想に成り濟まして居つた。それで今日本來の思想を以て論ずる時に一切驚きの目を以て見張られるのである。又我が五十一音の如き實は 人 文 發祥を殆ど分ち難き崇嚴なる素因を有して居る事に、新たなる興味をそゝらるるものである。

（十四） キリスト

齋藤島谷幡山氏の實査及び御研究に依れば、神倭朝十一代垂仁天皇の御代 キリストがパレスタインに於て、弟イスキリ歳三十三で、兄キリストの身代りとなり、十字架刑場の露と消え、其の當時キリストは、三十七歳で、自身は遁れて、我が日の本へ來朝し、其の時陸奥八ノ戸の港桧々崎に上陸し、そこに、石堂稲荷貝鮫神社（イシドウイナリカイサメ）といふがあり、それを第一歩の上陸遺蹟となされた節があると申されて居る。八ノ戸の西約十五里程の所に戸來岳がある。戸來岳と其の南、眉ケ平には神都の遺蹟が現に今ありますが、有名な神秘的十和田湖は、その西二三里である。その神都は五萬年も前と申される。仁々杵天皇（ニニギスミラミコト）が仙洞された所であるが、こゝに キリスト が暫く居住して居られた。後ち全國に巡遊して、八ノ戸太郎天空（フング）と申され、遂ひに壹百六歳に至り天壽を全ふされた事が、明瞭になつたと申されて居る。又それは竹の内御神寶の内 上代スミラミコト御骨像の多數ある内に、ヨセフ、キリストの名を刻してある骨像として發見され、其の他古記錄には、「イスキリスクリスマスカミ」とあり、トネコ（通譯）とヤレコ（軍人屯所）の八ノ戸に着いたといふのであるが、當時渡來された航海の日誌と見るべき文書あり、今これ等を、色々の角度から調査立證されて、近く文献として發行せられるとのことである。

（十五） 光被滿人

酒井勝軍氏の御研究に依れば、埃及ギザのピラミットより、もつと〳〵古いピラミットが、

廣島縣比婆郡本村に現存するとのことをである。それは英國の技師エドガア兄弟が、有名な專門的のピラミツト研究者であるとし、それを引用せられ、ピラミツトの原則として其の樣式の內には、內宮式と外宮式とあり、又各々單式と複式とがあつて、即ち四つの樣式がある、本來我が祖神　天照日大神を祭祀するには最も法式に叶つた神殿であつた。それであるから、ピラミツトの頂きに丸い太陽石があり、一神照明十六方の線條は、赤色の大理石と白色のそれとに彩どられ、頂點を中心として、方錐形七十六度五分の底邊に放射されて居る。故に上方よりこれを平面に望めば、恰かも、日本の海軍旗の如くに見得るといふ外裝を持つた筈である。そこで前記廣島縣本村のは、複樣內宮式のピラミツトであるが、その樣な裝があるのであるかどうか未だ不明であるが、その他、ピラミツトとしての條件が確實に備はつて居る。何しても、貳萬年餘も前の築造であつて、埃及ギザのものより非常に古い事は勿論でこれを竹內御神寶によれば、スミラミコト三十七代不合十二代彌廣殿作天皇の皇弟　大綱手彥尊がミコトノリを奉じ、吉備津根の本に、ヒルノカミ、スミラミコト、マタナ、メシヤ、タマシヒビヤウ、として築造せられしものであることを明瞭にされて居る。其の外岩手縣福岡戸來山にもあり、飛驒の高山にもあるがこれは綜合平面式とでもいふもので、五萬年も前のものではないかと申されて居る。

（十六）ムオゼ＝ロミユラス

又神武天皇から御四代前に　即ちスミラミコト九十四代不合六十九代神足別豐秋天　皇の御時代には　ムオゼ＝ロミユラス、が來朝して居る事が判明されて居る。御神寶の內には、それについて實に、表十戒石、裏十戒石、眞十戒石、オニツクス石、等存在し立證されて居る。

（十七）伏羲、神農

スミラミコト御八十三代不合五十八代御中主幸玉天　皇の御時代には、アヂチ[illegible]ナクニ王、伏羲氏と神農氏參朝して拜禮すとあり、伏羲、神農兩氏の居る所を伏氏ギの水門といふ。（之れは越中伏木である）居ること三十六年　アヂチエダナ國の天津に歸京し、その居る所を天津（北支那）と名づくとある。

（十八）超國家

實に我等空漠でなく、現實の日本を知らんとするものである。從つて空想でなく實際に即したる思想に生きんとするものである。そこで現在社會情勢の不安を除去せんとし、これを徹底的に解決するに、絕對至尊を仰ぎ奉り眞の日本精神を作興し、時代に目覺めるより外はない。

從來は、日本精神を說かんとせらるる場合、建國といふ言葉を引用して、建國の精神と申されるが、果して我が國に外國のそれを思はしむる樣な建國があつたらうか、これ神武皇紀を以て建國と斷ぜられてのことならば、我が國體は大いに趣きを異にする。なぜならば、天地開闢人類の創生より「スミラミコト」御二十五代を經て、現在二十六代は不合皇朝第一代となり、然る後不合皇朝第七十三代を以て、神倭皇朝に移り、神倭皇朝は移り移りて紀元二千五百九十六年は建國の年代ではありませぬ。今は神倭皇朝の年代といふことである。又宇宙經營の祖神から開國以來一系の皇室を頂く、我が日の本は全人類の祖國であつて、一般外國の樣に我が國に於ては建國などはあり得ないところの超國家である。恐らくこの建國といふことばの發生は、外國思想を以て我が國を律せんとした産物に外ならぬと思ふのであります。

(十九) 至上主義群

我が國に外國思想ともいふべき儒、佛が渡來した。それが德川時代に至つて全盛を極めた。然しながら、其の儒佛精神では、迚も立ち行かぬと判斷がついたので明治維新となつた。そこで今度はキリスト敎に依つて發達した、歐米文化を急いで採り入れたところ、今度は德川末期に於ける儒、佛の如く歐米思想が全盛となつた。然し既に〳〵社會の各層に行詰まりの非を暴露して來たではないか。そこで極めて大まかな申分ではあるが、外國の場合を觀るに、儒敎の本場ともいふ可き支那大陸はどうであるか、佛敎の本場印度は今何の狀か、キリスト敎の本場ロオマはどうか其の敎派に依つて一時發達を見せた歐米は、今地獄の淵の惱みではないか。實にどの方面を見ても一切の行詰りを通り越して、既に衰退の兆歷然と見得るではありませぬか。そこで更に我が日本をふりかへつて見直すのであるが、彼の儒佛の渡來以前迄は、全人類の祖國として、實に三種の神器の如き尊き思想を以て徹底せる一君萬民の實を擧げて居つた、ところが其の後、儒佛の勃興と反比例して其の一君萬民の絕對思想が衰退し、其の結果は遂に德川末期に於ける、明治維新とならざるを得ない情勢に迄持つて來たのであつた。我等は幸ひ其れを取戻した筈であつたが、その折角取戻した一君萬民の姿に、武家政治の代りとしての歐米文化式自由主義に依つて暗影を投ぜられた。即ち法律至上、經濟至上、財政至上、學術至上、藝術至上、戀愛至上、鬪爭至上等自由雜多な至上主義が隨所に簇生したのである。彼等は今其れを統御する絕對を持たない。外國の諸國家に於ける民族等にあつては、今の狀態では、他にいたし樣もないので、蝸牛の樣に、自ら築造した、勝手な至上主義的塔の中を、自己の天地とな

然し我が日本及びその民族の場合は、それを其のまゝ借用しても役立たない。即ちこれ等とは大いに趣きを異にして居るからである。何となれば、その自由勝手な、何々至上主義を綜合し、統御する所の、絶對至尊の、大かんながら道が存するからである。

然るに過去に於てこれを無視されて來た。いはゆる儒道至上主義、佛陀至上主義、耶蘇至上主義、其等、宗教至上主義群が、自然、絶對至尊の、大かんなから道を忘れたから、かくの如き行詰まりを生じたのである。これは日本ばかりでなく、遂にこの世界の全人類社會に、不安定を招來した、最も大なる證據であつて、又原因であると思ふものである。そこで今我等はこの大原因を明瞭にし、全般の皆様にこの道理を知つて頂くことの如何に急務であるかを痛感するものである。

(二十) 講演會

本論に關しては昭和十一年三月二十九日米澤市に於て特志家の主催によつて左記のやうな講演會を開いた。

拜啓陳者左記講演會開催致シ候間御知友御誘合セノ上御聽講被成下度御案内申上候

追テ本講演ハ神武皇紀以前ニ遡リ未ダ嘗テ歴史ニ現レザル事實ニ論及セラレ我國體ヲシテ本質的ニ闡明ナラシメラル、極メテ有益ノ御講演ニ付是非御聽講相成度申添候

○

一 演題　徹底せる思想國防論（太古史實研究之提唱五十一音國表及國字問題）

一 講演者　當市出身東京在住者　嵐田榮助

一 會場　興讓小學校内補習二階上

一 時日　三月二十九日午後一時

右

主催者（いろは順）

興讓館中學校長　戸田貫一
米澤高等小學校長　豐野學造
縣立米澤工業學校長　岡村武雄
上杉神社宮司　大乘寺良一
米澤郷土館長　椿辰之助
縣立米澤商業學校長　久野省三

米澤興讓小學校長　山本德四郎
米澤市學務課長　赤井運次郎
米澤圖書館長　西海枝信一
縣立米澤高等女學校長　相澤留五郎
米澤市助役　島津悌藏

然るところ、會後岡村武雄氏から本論に重要な關係を持つ個人主義否定の卓說を頂戴したからその全文を掲載して諸君の御參考に資する次第である。

山形縣立米澤工業學校長
山形縣立米澤工業試驗場長　岡村武雄君

先日は實に興深き御話を承りまして誠に忝ふ御座いました。特に私に取りましては千萬の味方を得た心持であつたのです。と申しますのは、甚だ烏滸がましい申條で御座いますが、私は數年前より心中一種の理論を構成し、すべてはそれに立命して行動して來たのでありますが、余り獨斷に過ぎはせぬかと、一抹の不安を持つて居たのでした。所が貴下の御講話によつて、其の疑念を全く一掃された樣に感じたからであります。そこで私の懷いて居ります理念の大要を申上げて御批正を御願する次第であります。

私ハ余程以前カラ、倫理學トカ、教育學トカノ基本理論ニ、少ナカラヌ疑ヒヲ持ツテ居タノデアリマス。(尤モソウ多クノモノヲ讀聞シタ譯デモアリマセンガ)ソレハ人格至善論トカ、智情意ノ圓滿發達說トカイフ點デアリマス。ナホ之ヲ別方面カラ申スナラバ。個人ナルモノニ絕對的存在意義ヲ認メテ居ラヌ點デアリマス。此點カライフナラバ、或ハ哲學ノ領域カモ知レマセン。然シ私ハ理念構成上カラノミ考ヘテ居ルノデス。

又一方宗教家ノイフ樣ナ、神ヤ佛ニ本願的ニ歸依セヨトイフコトニモ滿足出來マセンデシタ。ソコデ色々考ヘマシタ結果、次ノ樣ナ一種ノ理論ヲ構成シタノデアリマス。

第一ニ人間ハ集團ノ構成分子トシテノミ存在意義ヲ有スルモノデアツテ、個人ナドニ絕對的意義ハナイトイフコトデス。之モ理屈デハアリマセン。唯ソウ思フノデス。一體個人ナントイフモノハ、實在シ得ルモノデセウカ。眼ヲ閉ヂテ考ヘテモ、眼ヲ開イテ視テモ、何ノ「ツナガリ」モナイ、「一ツ」ナドイフモノハアルデセウカ。私トシテハソンナモノガ、實在シ得ナイト、信ジテ居ルノデアリマス。

第二集團(適當ナ言葉ヲ知リマセンカラ、假ニソウ名附ケテ置キマス)ガ構成サレルニハ、

必ズ何等カノ因縁ガアルトイフコトデス。因縁、ニハ血縁、地縁、理縁、（文化縁）利縁等種々ノモノガ擧ゲラレマスガ、血縁ト地縁トガ最モ根本的ナモノダト思ヒマス。

第三集團ニハ必ズ中心ガナケレバナラヌトイフコトデス。統心ガナカツタナラ、集團トハナリマセン。石ヤ砂其マヽデハ集團トハ申サレマスマイ。唯列べタダケデ其處ニ何ノ意味ガアルデセウ。

サレバ人間ハ創生ノ時ヨリ「人間創生ニツキテハ別ノ機會ニ述ベサシテ頂キマス」集團ヲ生成シタノデアツテ、之ガ時ノフアンクションヲ加フルニ從ヒ、スベテノ因縁相生ジ、カクテ統心ヲ核トシテ、緊密ニ結合シタモノガ、恒久集團トナルノデアリマシテ、之ガ眞ノ意味デノ國家デセウ。サテ飜ツテ我ガ大日本國ヲ考察致シマスルニ、血縁集團ノ大和民族ハ、伊弉諾、伊弉冊ノ二神ニヨツテ國土ヲ造成セラレ、即チ地縁ヲ結ビ、天祖ノ御出現ニヨツテ中心確立シ、天孫ノ御降臨ニヨツテ國家ノ體ヲ形成シ、神武天皇ノ御建國ニヨツテ、其規模全ク完成シタノデアリマス。但シ此ノ點貴下ノ御話ニ從ヘバ、我等ハ創生ノトキヨリ、國家ノ體ヲナシテ居ツタコトニナリ、外國ハ其枝（エダ）トイフコトニナリマスネ。

爾來三千年、聊カノ動搖モナク、否寧ロ時ト共ニ大ニ、其內容ヲ充實シ、恒久集團完備セル國家トナツタノデアリマス。サレバ我等ハ、日本國民トシテノミ存在意義ヲ有シ、理想的國民タルコトガ至善ダトイフコトニナルノデアリマス。從ツテ國際道德モ、人類愛モ、スベテ此ノ觀點ヨリ判斷セラルベキモノダト信ズルノデアリマス。

こんな事に就ては、其の道の達識者、學者等多々御いでになりますのに、私如きが兎角の論議をなすこと、甚だ僭越の極みでありますが、又一方から考へると、其の道の方々といふものは、余りに詳細に亘つて研究せらるゝ結果、或は本末の關係に錯覺を起したり、理念と方式論又は方法論との區別が明かでなかつたりする虞もないでもないと思ふのであります。私として は、自分が、心から滿足し得らるゝ、又前に申上げました之に立命して、不安なく行動し得らるる理念を構成して居るに過ぎません。

○壹ケ年を十二ケ月

一月。　二月。　三月。　四月。　五月。　六月。
七月。　八月。　九月。　十月。　十一月。　十二月。

○壹ケ月を三回

月始め十日を立。　中を圓。　終りを籠といふ。

○四　季

春。　夏。　秋。　冬。

○八　方

東。　東南。　南。　南西。　西。　西北。　北。　北東

○十二支

子。　丑。　寅。　卯。　辰。　巳。　午。　未。　申。　酉。　戌。　亥。

昭和十一年五月二十八日印刷
昭和十一年六月一日發行

著作兼發行者　嵐田榮助
東京市神田區錦町二丁目五番地
印刷人　株式會社文成社印刷所　前田宗松
東京市京橋區石神井立野町八九八
發行所　太古史實研究會
代表者　嵐田榮助
東京市京橋區石神井立野町八九九

發賣所　日の本書院
振替口座東京四八六一五番
賣捌所　宗平書店
東京市神田區錦町一丁目七番地
振替口座東京三四三一〇番
電話神田(25)一七九五番

徹底せる思想國防論
（實價五拾錢）
送料四錢

M.5.28

四六判四四五頁再版

勳四等岩田大中著

人類之祖國

太古日本史

太古書院東京支部

定價二円五十錢 送料十四錢

▼民族根源の不明は、恰も人生れて父母の不明なるが如く、民族の國體明徴と相俟て極めて重大なる問題なるが如く、民族傳說の由來根源を研究明徴にするは、人類學的の祖先を明にすると共に、其國民發祥の自覺を促さんとの欲する有識者の二大要求に應ずるものである。

東京淺草川河町四五番地
振替東京八四五二〇

H625
15042
C7

353848